高槻市文化財年報

平成3年度

I　埋蔵文化財の調査 …… 1

1.　平成3年度の調査

2.　調査の概要

山陽道跡　宮崎　康雄

嶋上郡衙跡　高橋　公一

上田部遺跡　鐘ケ江一朗

古曽部遺跡　宮崎　康雄

梶原古墳群　冨成　哲也
大塚　隆
川崎　文子
川端　博明

II　指定文化財 …… 34

1.　芥川宿絵図

2.　今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡

III　文化財保護啓発事業 …… 37

IV　研究ノート …… 40

嶋上郡衙「正倉」についての覚書　高橋　公一

丘の上のムラ－古曽部遺跡の調査から－　宮崎　康雄

芥川城跡出土資料の検討　橋本　久和

明州港の歴代青磁輸出試論　林　士民（著）
橋本　久和（訳）

1993年3月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成３年度

１９９３年３月

高槻市教育委員会

Ⅰ　埋蔵文化財の調査

1．平成３年度の発掘調査状況

平成３年度における土木工事等による埋蔵文化財発掘調査申請件数は132件となり、前年度に比べ18.9％増加となった。調査件数も93件となり、これまでで最も届出・調査件数の多い年となった。

届出別にみると、例年どおり「個人住宅の増・改築」が20件ともっとも多いが昨年度の30件と比べれば大きく減少している。これに対し、「造成工事等」は14件と前年度の５倍近くに急増していることが今年度の特徴となっている（表１）。

公共事業関係では、「水道・水路改修」、「上下水道整備」がほぼ昨年度並の件数を維持し、引き続き都市基盤の整備が進められている。

遺跡別にみると、嶋上郡衙跡が圧倒的に多く、次いで高槻城跡、安満遺跡の順になっている。地域的には、高槻城跡・上田部遺跡などの市域の中心地区に増加傾向がみられるのが特徴的である。最後に、平成３年度に実施した調査の概略を一覧表で掲げておく（表３、図１・２）。

個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫等	造成工事等	道路・水路改修	上下水道整備	その他	計
20	6	13	14	23	8	9	93

表１．平成３年度　届出別調査件数

遺跡名	件数	遺跡名	件数	遺跡名	件数
嶋上郡衙跡	39	一本木古墳	1	紅茸山遺跡	1
上土室遺跡	1	富田遺跡	3	安満北遺跡	1
新池遺跡	1	芝生遺跡	1	安満遺跡	9
上氷室遺跡	1	大蔵司遺跡	3	天川遺跡	1
氷室遺跡	1	芥川遺跡	2	萩之庄関連遺跡	1
氷室塚古墳	2	上田部遺跡	3	梶原寺跡	1
郡家本町遺跡	1	高槻城跡	10		
郡家今城遺跡	3	天神山遺跡	1		
郡家車塚古墳	2	古曽部遺跡	2		
前塚古墳	1	古曽部南遺跡	1	合計	93

表２．平成３年度　遺跡別調査件数

No.	遺跡名（地区）	所在地	届出者	用途	面積（㎡）	担当	調査期間	備考
1	嶋上郡衙跡 74－G	郡家新町156-31	中村昭三	個人住宅	52.75	大船	3.4.2	遺構・遺物なし
2	67－G	川西町1丁目1086-18 1087-9	吉村二郎	〃	54.25	〃	3.4.3	〃
3	15－F・G	郡家本町317	高槻市長	道路整備	36.7	森田	3.4.5	〃
4	56－N・O	川西町1丁目1014-3	㈱アキボウ	倉庫建設	807.47	宮崎	3.4.8～3.5.28	本書掲載
5	76－A	川西町1丁目1023-3	環境機器㈱	〃	190.95	大船	3.4.11～3.4.17	遺構・遺物なし
6	24－K・O，34－D・G・H	郡家新町282～288	高槻市長	水路改修	300.00	北原	3.4.16～3.4.26	「嶋上遺跡群16」＝（概要16）に掲載
7	〃	〃	〃	〃	〃	大船	3.11.15	〃
8	48－G	川西町1丁目956-13	中村和仁	個人住宅	52.56	〃	3.5.1	遺構・遺物なし
9	84－H	今城町164-34	矢田満	〃	100.18	〃	3.5.23	〃
10	4－I	郡家本町914	土戸實	倉庫建設	92.29	北原	3.5.30～3.6.4	柱穴・包含層確認
11	37－A・E・I・M	清福寺町987	羽瀬種三	露天資材置場	1,807.13	冨成	3.6.3～3.7.20	現状変更
12	67－G	川西町1丁目1086-5 1087-6	吉田興	個人住宅	57.17	北原	3.6.6	包含層確認
13	5－C・G・L・P	郡家本町32～52	高槻市長	水道管布設	1,527.4	大船	3.6.13～3.6.28	包含層確認
14	22－B	郡家本町524-1	山本桂幸	店舗付住宅	331.74	橋本	3.7.9	遺構・遺物なし
15	38－K	清福寺町919-24	白石東雄	個人住宅	56.31	大船	3.7.22	包含層確認
16	18－C	清福寺町829-14	秦功	〃	58.76	宮崎	3.8.6	概要16に掲載
17	48－O	川西町1丁目953-7	井上修	〃	66.32	大船	3.8.27	包含層確認
18	57－K・O，58－E・I他	川西町1丁目1092-1他	高槻市長	下水道築造	370.00	〃	3.9.10	〃
19	12－N	郡家本町543-1	土戸実	駐車場築造	563.00	北原	3.10.21～3.11.6	円墳1基確認
20	16－J	清福寺町896-1、897 901-1	並川淳	露天駐車場造成	1,265.00	高橋	3.10.31～4.1.27	本書掲載
21	85－P	郡家新町163-36	森實晴雄	個人住宅	115.92	大船	3.11.2	概要16に掲載
22	38－J	清福寺町919-34、920-1	大林真知子	〃	310.18	〃	3.11.19	弥生土器出土
23	54－H・L	郡家新町357-1 の一部	関西産業㈱	宅地造成	413.00	〃	3.12.2～3.12.13	遺構・遺物なし
24	75－B・F	郡家新町232他	高槻市長	水路改修	78.00	北原	3.12.4～3.12.7	柱穴・包含層確認
25	17－H・K	清福寺町808	大阪セキスイハイム㈱	共同住宅	958.00	橋本	3.12.5～4.1.30	弥生後期の不定形土壙などを検出
26	3－H，4－E	郡家本町738他	高槻市長	水路改修	25.8	森田	3.12.9	遺構・遺物なし
27	58－C・D	川西町1丁目1106-2他	〃	水路整備	49.2	〃	3.12.9	〃
28	28－A	清福寺町854-2・3	〃	用水路改修	5.6	〃	3.12.9	〃
29	35－A～P	郡家新町760	松下電子工業㈱	物置立替	129.00	鐘ケ江	3.12.	現状変更
30	67－O	川西町1丁目1086-17 1087-23	松下常夫	個人住宅	55.18	大船	3.12.18	包含層確認
31	53－L	郡家新町385-2	〃	〃	9.42	〃	3.12.18	遺構・遺物なし
32	56－M	郡家新町995-4	〃	〃	263.00	北原	4.1.8～4.1.22	〃
33	37－L	川西町1丁目874-1	〃	下水道	211.00	鐘ケ江	4.1.16	奈良時代の土器出土
34	24－C・G	郡家新町330，332-1	〃	農道整備	80.00	大船	4.2.5	包含層確認
35	34－O	郡家新町273 の一部	岩本義一	農小屋建設	54.00	〃	4.2.8	現状変更
36	66－E，86－A	川西町1丁目1013-2他	高槻市長	下水道整備	5.95	〃	4.3.6～4.3.7	包含層確認
37	54－P，55－M	郡家新町357-1 の一部	岩本平一郎	個人住宅	396.63	橋本	4.3.19～4.4.19	ナイフ形石器出土
38	〃	〃	〃	共同住宅	458.40	〃	4.3.19～4.4.19	〃
39	上土室遺跡	上土室5丁目91-1、553 583	ケーアンドエヌ㈱	増改築工事	21,648.00	鐘ケ江	4.2.14	試掘調査
40	新池遺跡	上土室1丁目1他	高槻市長	確認調査	16.00	森田	3.4.	18号窯確認調査
41	上氷室遺跡	岡本町116、氷室町 528-1 他	茨木土木事務所	都市計画道路	10,000.00	北原	3.8.27	遺構・遺物なし
42	氷室遺跡	氷室町2丁目666	㈱大阪巴組鉄工所	休憩室新築工事	942.08	大船	3.7.3	〃
43	氷室塚古墳	氷室町2丁目908	矢田修	個人住宅	414.65	橋本	3.6.27	〃
44	〃	氷室町2丁目903-12	甲田伝三郎	共同住宅	210.12	北原	3.9.21～3.9.26	〃
45	郡家本町遺跡	郡家本町1000-6	久保田直二郎	個人住宅	476.00	高橋	3.6.4～3.8.1	概要16に掲載
46	郡家今城遺跡	郡家新町143-1 他	高槻市長	水路改修	61.2	北原	3.11.29	遺構・遺物なし
47	〃	郡家新町45-1	高谷文子	露天駐車場造成	364.00	〃	3.12.9～12.19	〃
48	〃	郡家新町64-2	高槻市長	道路整備	12.71	〃	4.1.8	柱穴・溝を検出
49	郡家車塚古墳	岡本町34-1	宮本敏夫	盛土整地工事	49.00	大船	4.3.19～4.5.7	葺石・埴輪検出
50	〃	〃	阪急電鉄（株）	〃	49.00	〃	4.3.19～4.5.7	〃
51	前塚古墳	岡本町33-2	有川治子	駐車場造成	711.7	宮崎	3.6.6～3.7.7	〃
52	一本木古墳	郡家新町155-2 他	高槻市長	水路改修	22.1	北原	4.2.4～4.2.5	古墳の盛土を確認
53	富田遺跡	富田町6丁目10～23	ＮＴＴ茨木支店	電話地下線埋設	141.3	大船	3.11.15	遺構・遺物なし

表3　平成3年度調査一覧

No.	遺跡名（地区）	所在地	届出者	用途	面積（㎡）	担当	調査期間	備考
54	富田遺跡	富田町6丁目3051-10 他	植田昭善	個人住宅	122.01	大船	4.1.23	遺構・遺物なし
55	〃	〃 4丁目10-10	高槻市長	防災設備設置	179	鐘ケ江	4.2.1	中世井戸1基検出
56	芝生遺跡	芝生町4丁目1	〃	下水道	92.8	森田	4.1.30	遺構・遺物なし
57	大蔵司遺跡	大蔵司3丁目291、292	古藤ヨシ子	駐車場造成	1,900.00	橋本	3.10.28	平安時代の不定形土壙検出
58	〃	〃 3丁目294	羽瀬佐一郎	〃	1,900.00	〃	3.10.28～3.11.6	〃
59	〃	〃 3丁目296	門川啓三	〃	470.00	〃	3.10.28	〃
60	芥川遺跡	紫町35他	日本たばこ産業㈱	研究所新築	75,700.00	〃	1.4.1～3.5.27	H2年度年報に掲載
61	〃	殿町53	吉田満明	個人住宅	237.95	大船	4.3.21～4.3.31	遺構・遺物なし
62	上田部遺跡	桃園町510-1 の一部	高槻市長	市庁舎建設	4,300.00	鐘ケ江	3.2.18～3.8.13	本書掲載
63	〃	上田部5、紺屋町8	NTT茨木支店	電話地下線埋設	63.35	大船	3.11.15	〃
64	〃	桃園町地内	茨木土木事務所	高槻柱本線拡幅	588.00	鐘ケ江	3.11.21	〃
65	〃	〃	〃	〃	588.00	〃	3.3.26～3.4.1	〃
66	高槻城跡	城内町1-35	高槻市長	技術棟建設	600.00	高橋	3.3.19～3.4.30	H2年度年報に掲載
67	〃	野見町1146-2	中川市太郎	社務所新築	409.00	鐘ケ江	3.4.12～3.4.15	奈良時代遺構・遺物
68	〃	城内町1498-1	高槻市長	公民館新築	1,800.00	〃	3.8.19～3.10.24	中・近世の堀検出
69	〃	野見町2-30、大手町3-1	大阪ガス㈱	ガス管埋設	130.00	〃	3.9.17	遺構・遺物なし
70	〃	大手町、野見町	高槻市長	道路改良工事	1,080.00	〃	3.11.11	〃
71	〃	野見町2-20、大手町1-26	大阪ガス㈱	ガス管埋設	160.00	〃	3.11.18	〃
72	〃	城内町1498-1	高槻市長	歩行者道路整備	300.00	森田	3.12.24	〃
73	〃	〃 999-3、1001-6	更谷清治	個人住宅	113.21	〃	4.1.17	概要16に掲載
74	〃	〃 1056-1	高槻市長	道路整備	63.02	〃	4.1.27	東大手の土橋確認
75	〃	〃 1045-10、1498-2	西村清、津也子	個人住宅	194.00	大船	4.2.27	概要16に掲載
76	天神山遺跡	天神町2丁目937-8 他	（宗）広智寺	共同住宅等建設	6,010.15	〃	3.5.28	遺構・遺物なし
77	古曽部遺跡	古曽部町5丁目204-3 他	良恵産業㈱	宅地造成	188,000.00	宮崎	3.9.1～4.7.31	本書掲載
78	〃	〃 214	山永興業㈱	〃	846.00	〃	3.9.1	〃
79	古曽部南遺跡	〃 2丁目地内	高槻市長	下水道	7.48	〃	3.4.6	遺構・遺物なし
80	紅茸山遺跡	別所本町579-1 他	良恵産業㈱	共同住宅	14,225.00	〃	3.8.26	石鏃出土・遺構なし
81	安満北遺跡	安満北の町3-10	高槻市長	下水道布設	50.00	大船	3.7.22～3.7.29	遺構・遺物なし
82	安満遺跡	八丁畷町270-1	〃	道路整備	160.4	宮崎	3.4.5	〃
83	〃	高垣町2-1、3-1	太田ステ	畑地造成	633.00	橋本	3.7.22～3.8.21	弥生井戸状遺構検出
84	〃	〃 5-1	松山一夫	〃	179.00	〃	3.7.22～3.8.29	弥生中期方形周溝墓
85	〃	安満新町4	高槻市長	下水道	38.35	大船	3.9.2	遺構・遺物なし
86	〃	八丁畷町184 の一部	京都大学	水路改修	12.00	〃	3.11.25	〃
87	〃	〃 230-1 他	高槻市長	道路整備	142.31	鐘ケ江	3.11.28	弥生土器出土
88	〃	〃 390 他	〃	〃	19.53	〃	4.1.10	〃
89	〃	〃 190 の一部	京都大学	温室建設	280.8	〃	4.3.2	〃
90	〃	安満東の町425、426	大田シゲノ	共同住宅	740.44	高橋	4.3.26	包含層確認
91	天川遺跡	須賀町273～276-1	北摂企業㈱	倉庫建設	990.00	北原	3.2.1 ～3.4.6	11～14世紀の集落跡
92	萩之庄関連	萩之庄3丁目3-5	辰野㈱	店舗建設	50,000.00	橋本	4.2.12	遺構・遺物なし
93	梶原寺跡	梶原1丁目255	梶村市郎	個人住宅	37.79	大船	3.4.22～3.5.2	〃

図1　埋蔵文化財調査位置図（嶋上郡衙跡）

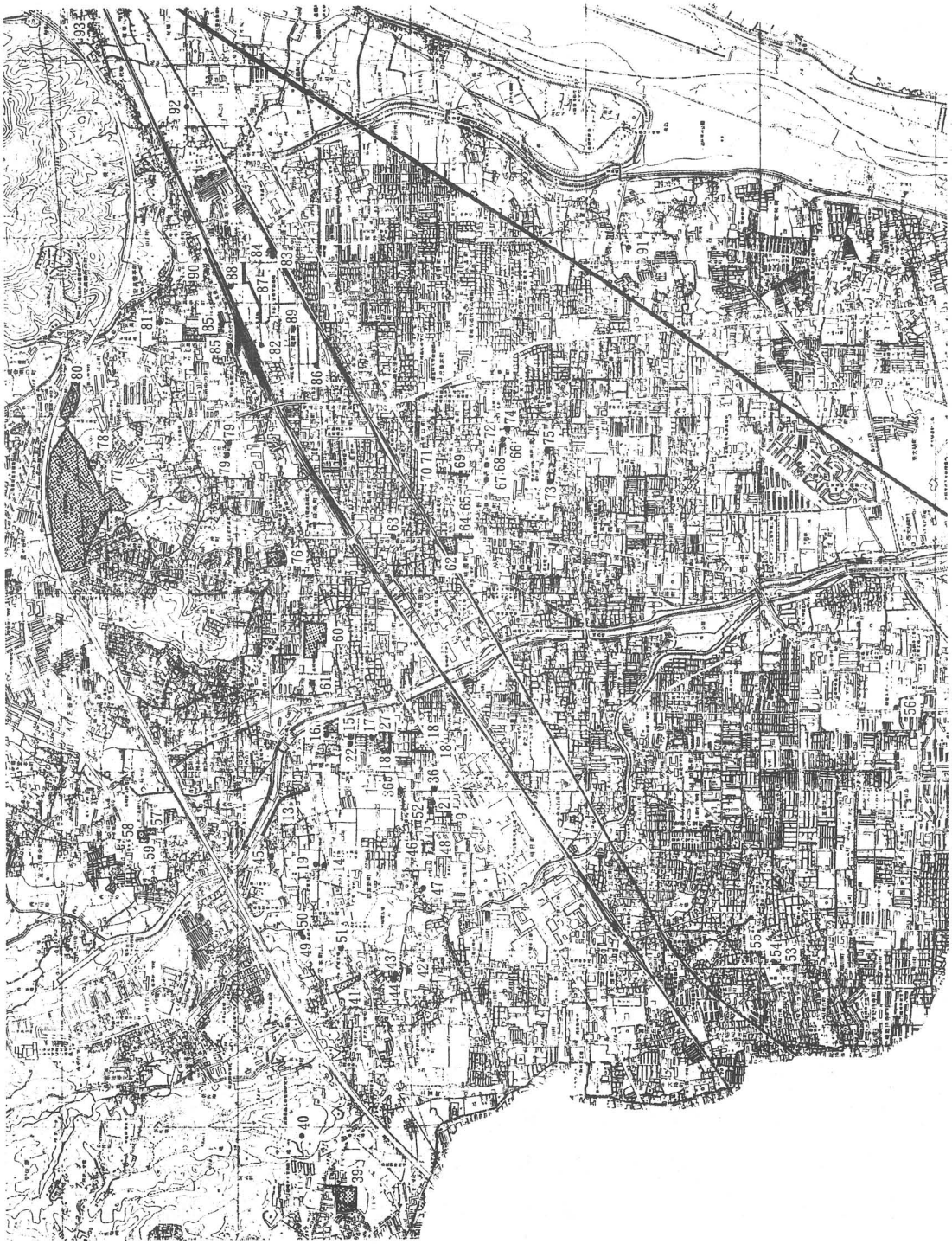


図2　埋蔵文化財調査位置図

2．調査の概要

山陽道跡の調査

宮崎康雄

嶋上郡衙跡は縄文時代から中世まで連綿とつづく複合遺跡である。奈良・平安時代には嶋上郡衙がおかれ、その中心部分は国史跡に指定されている。南側には平城京や平安京などの宮都と太宰府を結んだ山陽道が東西にのび、現代では、西国街道としてその姿を偲ぶことができる。周辺地域で実施した調査では、道路敷や側溝などの道路跡を確認している。今回報告する嶋上郡衙跡56－N・O地区は郡庁院想定地の南方、ちょうど山陽道が通過する地点にあたり、道路に関連するなんらかの遺構の存在が予測される地点にある。

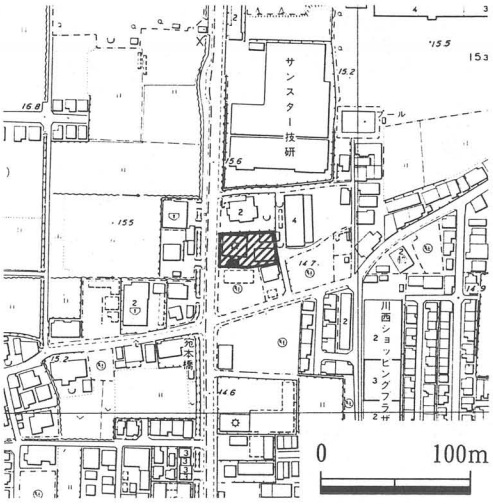


図1　調査位置図

検出した遺構の概略は以下のとおりである。（図版第5～7・23）

溝1は幅1.8m、深さ0.4mを測り、東西方向に延びて調査区外へとつづく。平瓦・土器片とともに延喜通宝1枚が出土した。溝2は幅1.6m、深さ0.25mを測り、東西方向に延びる。溝3に切られている。遺物は出土しなかった。溝3は幅2.1m、深さ0.3mを測る東西溝で、溝2を切る。瓦片とともに貞観永宝1枚が溝底に接して出土した。また、溝3の南側では溝4に切られた状態で、粘土にこぶし大の石や瓦片をまぜて整地した道路敷を検出している。溝4は幅1.5m、深さ0.3mを測り、東西方向に延びる。遺物は出土しなかった。溝5は幅1.5m、深さ0.1mを測り、東西方向に延びる。遺物は出土しなかった。これら溝1～5は調査区全域に薄くひろがる暗灰色粘土を切っている。この粘土層には溝にほぼ平行に続く牛？の足跡が各所でみられる。水田などの可能性もあるが、畦畔等は検出できなかった。溝6は幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝1～5と同じく東西方向に延びるが、粘土層の下で検出していることから時期

的にもっとも古く、形状などからみても前者とは性格が異なるようである。

今回の調査で検出した溝１～５は周辺部の調査成果から判断して、山陽道の南北の側溝と考えられる。それぞれの溝は規模や検出した状況、出土した遺物などから、溝１と溝４、溝２と溝５が対応する関係にあることがわかった。これにより側溝を再掘削して道路を整備したことがうかがえる。

つぎに検出した道路遺構の変遷についてまとめてみる。調査地周辺は水田もしくは湿地であったようであるが、９世紀ごろにはすでに山陽道がつくられ、路面の南北には側溝（溝２・溝５）が掘削される。道幅は６～７ｍである（図２ａ）。９世紀中頃から後半にかけて溝２と溝５が埋没した後、あらたに側溝（溝３）が掘削される。このとき路面は礫や瓦を混和させた粘土によって整備されていた。道幅は6.5m以上である（図２ｂ）。10世紀には溝３が埋没し、あらたに溝１と溝４が掘削される。この時の道幅は約６ｍである（図２ｃ）。これらの溝が埋没した後に、新しく側溝は掘削された痕跡はない。調査地の南側約30mには西国街道が通っており、あるいは山陽道も南側につくり替えられたのかもしれない。

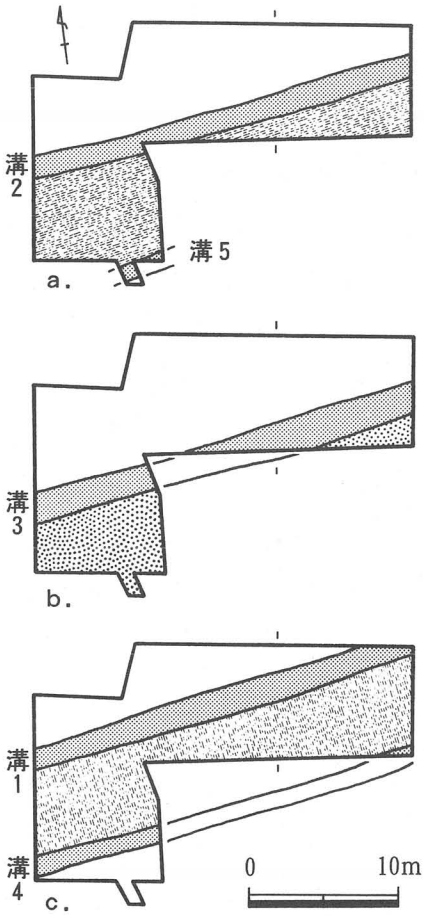


図２　山陽道の変遷

山陽道は律令時代に最も重要な街道として設置されたが、その調査例は少なく、畿内では京都府大山崎町などで部分的に検出されているのみである。また、一つの調査区で山陽道の両側の側溝を同時に検出したこと、そして道路整備の時期やその規模を把握できたことは大きな成果であり、律令期の交通路を考えるうえで貴重な資料を提供したといえよう。

嶋上郡衙跡（16－J地区）の調査

高橋公一

嶋上郡衙跡は、昭和40年の試掘調査以来継続しておこなわれ、郡衙の構造や成立過程について貴重な資料を蓄積してきた。

今回の調査地は、史跡指定地の北側に隣接する地域で、推定新期郡庁院の北西に位置する。小字名は大畑である。今回の調査で検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居3棟、律令期の掘立柱建物6棟、溝状遺構などである。以下、律令期の遺構の概略を述べる（図版第8～第11）。

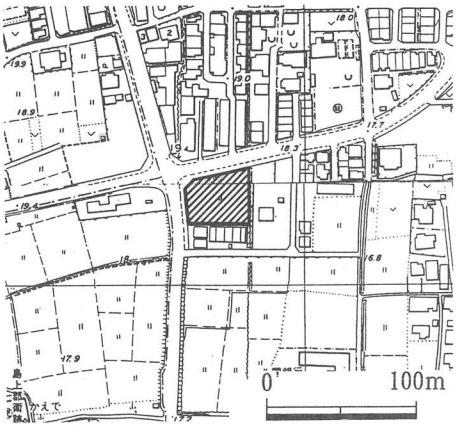


図1　調査位置図

掘立柱建物1は調査区北端で検出した。桁行3間以上（現状2間5.4m）、梁行2間（4.96m）の南北棟である。柱穴は1辺1.3～1.6m、深さ0.7mの方形で、非常に巨大であり、嶋上郡衙跡検出例においては最大級のものである。柱穴内に柱根は遺存していなかったが、埋土には幅0.3mの柱痕跡がみられる（図3）。方位はN－5度－W（方位は磁北を使用、以下同じ）である。掘立柱建物2は掘立柱建物1の南で検出した。桁行3間（5.5m）、梁行2間（1.6m）の東西棟で、東妻柱を欠いている。柱穴は一辺0.4～0.6mの方形を呈し深さは0.2mを測る。方位はN－3度－Wである。掘立柱建物3は調査区西端で検出した。西側柱筋が調査区外であるが、桁行4間（9.2m）梁行2間（推定復元6.2m）の身舎に東庇のつくものと考えられる。柱穴は一辺0.6～1.0mの方形ないし隅丸方形を呈し、深さ0.2～0.3m、方位は磁北をさしている。掘立柱建物4は竪穴住居と重複している。桁行4間（6.4m）、梁行2間（4.0m）の南北棟だが、方位がN－38度－Wと大きく西に振っている。溝状遺構によっていくつかの柱穴が破壊されている。柱穴は一辺0.5～0.8mの方形で、深さは0.3mを測る。掘立柱建物5は調査区東端でその一部を検出した。桁行2間以上、梁行2間（2.8m）の東西棟と思われる。柱穴は一辺0.8mの方形で深さ0.3m、方位はN－16度－Wである。掘立柱建物6は、調査区北東隅でその南端部分を検出した。桁行2間以上、

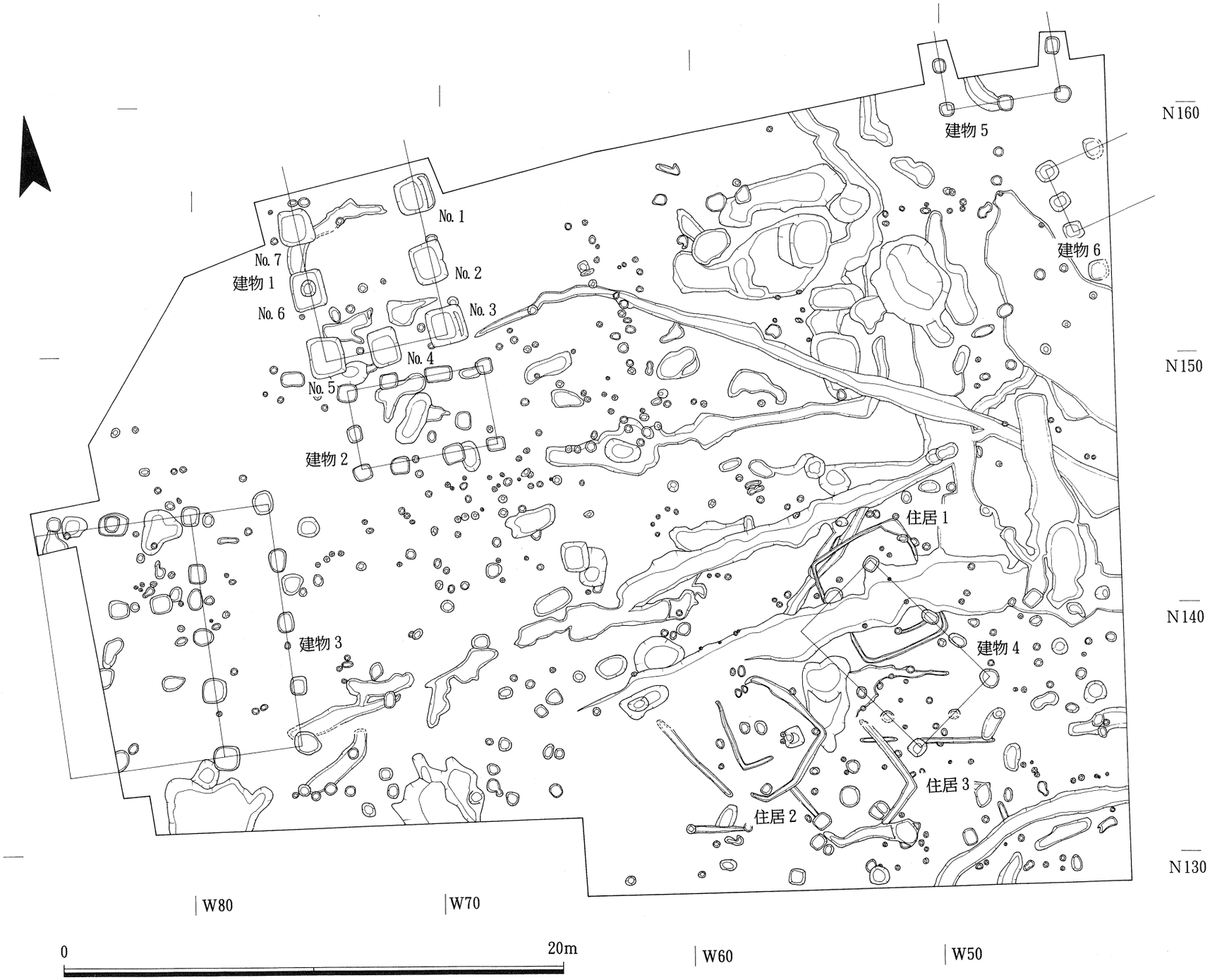


図 2　嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）遺構平面図

梁行２間（4.8m）の南北棟と思われる。柱穴は一辺0.6mの方形を呈し、深さは0.2m、方位は磁北をさしている。

このほか、調査区東半では溝状遺構を検出した。幅0.4～2.0m、深さ0.1～0.3mで、幅や深さを変化させながら縦横にはしっている。その中にはある一定の幅と深さを保って直進するものや、深さが突然深くなり土坑状となるものがある。すべての溝が同時に存在したわけではないとみられる。埋土中より７世紀後半の土器が出土している。

今回検出した律令期の遺構は、切り合いや、建物方位から３時期にわけられる。まず７世紀中頃に掘立柱建物４が建てられる。次いで溝状遺構が調査区東半部に掘られ、７世紀後半に埋められる。これとほぼ同時に掘立柱建物５が建てられる。そして７世紀末から８世紀初には最大級の掘形をもつ掘立柱建物１をはじめ、２・３・６が順次建てられる。このとき、掘立柱建物１と３はやや方位が異なるとはいえ、南東の広場を介し、柱筋をそろえる雁行型の配置とみることができる。掘立柱建物３が東庇であることもこれと符号する。こうした大型の掘形をもつ掘立柱建物や、広場をかこむような建物配置は郡庁院の北側では初の検出であり、その性格とともに非常に注目すべき遺構といえよう。

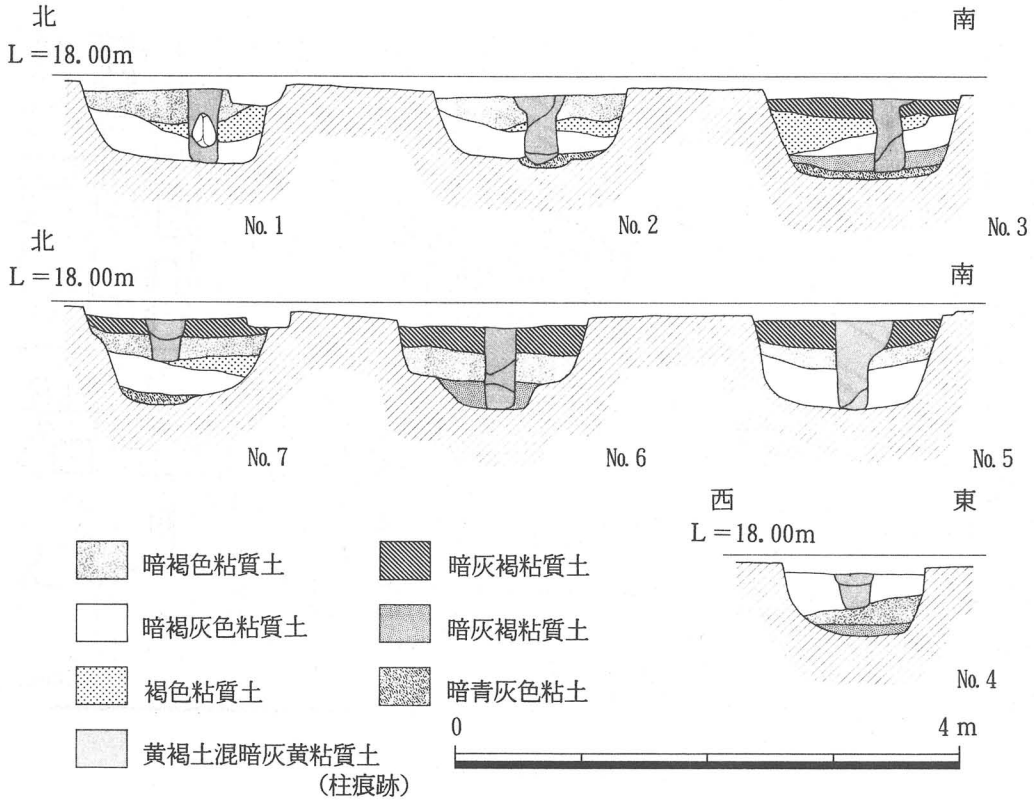


図３　掘立柱建物１柱穴土層図

上田部遺跡の調査

鐘ケ江　一　朗

1．調査の経過

上田部遺跡は、昭和45年の市役所現庁舎建設に際して実施した試掘調査で発見された。このときの調査では、奈良時代の掘立柱建物跡と溝、水田などが検出され、「天平宝字七年」銘の木簡や鋤などの農具が出土したことから、集落遺跡として周知された。それ以後、阪急高架、市役所立体駐車場建設、府道拡幅などの事業に伴い数次の発掘調査が行なわれている。

平成３年度には、庁舎北側駐車場跡地に計画された（仮称）総合センター建設工事と、庁舎東側の府道改良工事に伴う調査を実施した。

2．（仮称）総合センター用地の調査概要

調査は、重機で盛土と旧水田整地土を除去して搬出し、以下を人力で精査して行っ

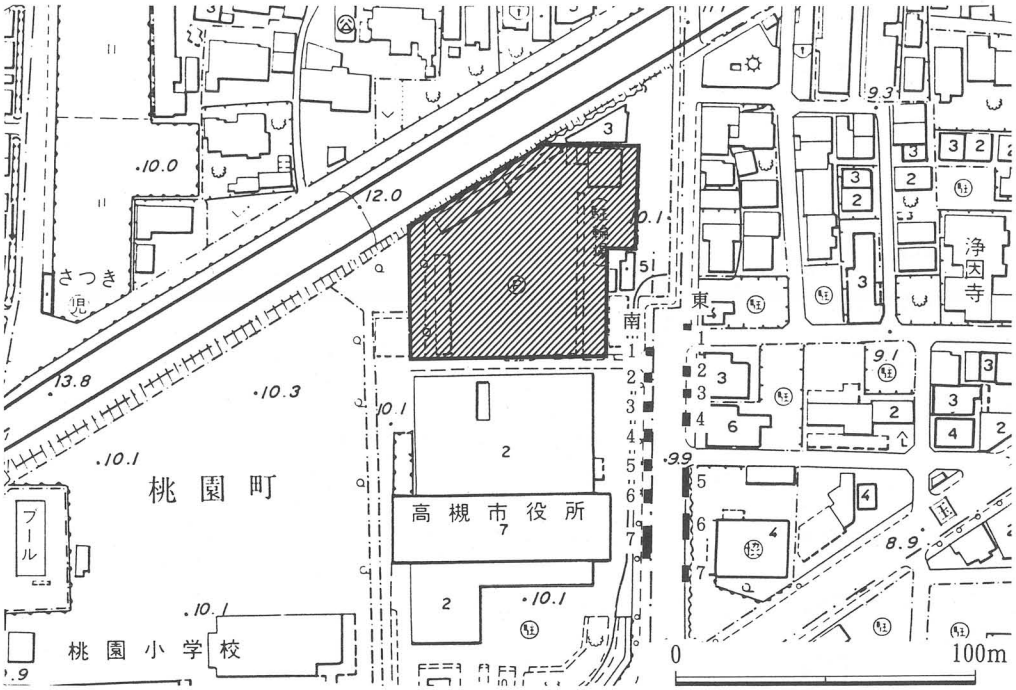


図１　調査位置図

た。検出した遺構面は、地表下0.8〜1.8m（標高9.2〜8.2m）にあって北西から東南へゆるやかに傾斜し、大半がシルトないし粘質土で部分的に礫土があらわれていた。主として調査地の西〜中央部で12〜13世紀、東部では8〜9世紀の遺構・遺物が検出された。中央部以西では、中世遺構面の下層から8〜9世紀代の水田面が検出され、さらに下方から弥生時代の遺構面を検出したため、最終的には地表下約3.2mまで掘下げる結果となった。

なお調査にあたり、駐車場跡地を一括して先行実施したのち、その南〜西側の道路について拡張する方法をとった。図3は先行した当初調査区のみ示してある。

＜遺構と遺物＞

検出遺構の時期は、大きく弥生時代、9世紀代、12世紀代の3つに分けられる。また遺物は整理箱にして約150箱程度出土した。時期は前3世紀から18世紀にわたるが遺構に伴うものは前3〜1、8〜13世紀に納まる。

弥生時代の遺構は、調査区西半部の標高6.8m付近で検出した。検出面は黒褐色粘土層上面で、同層上部には弥生時代前期の土器片が少量混入している。

溝　1　調査区西寄りで検出したゆるやかに蛇行する南北溝で、幅約3m、深さ0.4〜0.7mあり、北から南へ緩やかな傾斜をもつ。調査区南端で西からの溝と合流するらしく、その溝に設けられた堰の一部を検出した。杭・横木を芯に、粘土を盛り上げて流れに直交する土手を築いたものとみられる。弥生時代中期の甕2点や、「三角鏃」など若干の木製品が出土している。堆積土は多量の木の葉・枝などを含む泥質土ないし粘土で、水が滞留していた感がある。

溝　2　北西から南東へ流れており、幅約3m、深さ0.3〜0.8mある。中央部で、杭を打ち込み、横木を渡して土や粘土を盛った堰を検出した。両岸から土手を張り出させたような構造で、その下流はオーバーフローした水にえぐられたために一段と深くなっている。弥生時代後期の土器片や鋤1点が出土した。

溝　3　溝2の堰に取りつく東西溝で、幅2m、深さ0.2mある。底は足跡で凹凸しており、この足跡は堰をはさんでさらに西側へ伸びていた。また溝2・3沿いには点々と杭が打たれており、これらは同時期のものであって水田へ水を引くための一連の施設であろうと考えられる。なお溝4は、溝3より古いが性格不明である。調査区全体を東西に貫くトレンチを設定したが、溝4から東側では遺構を検

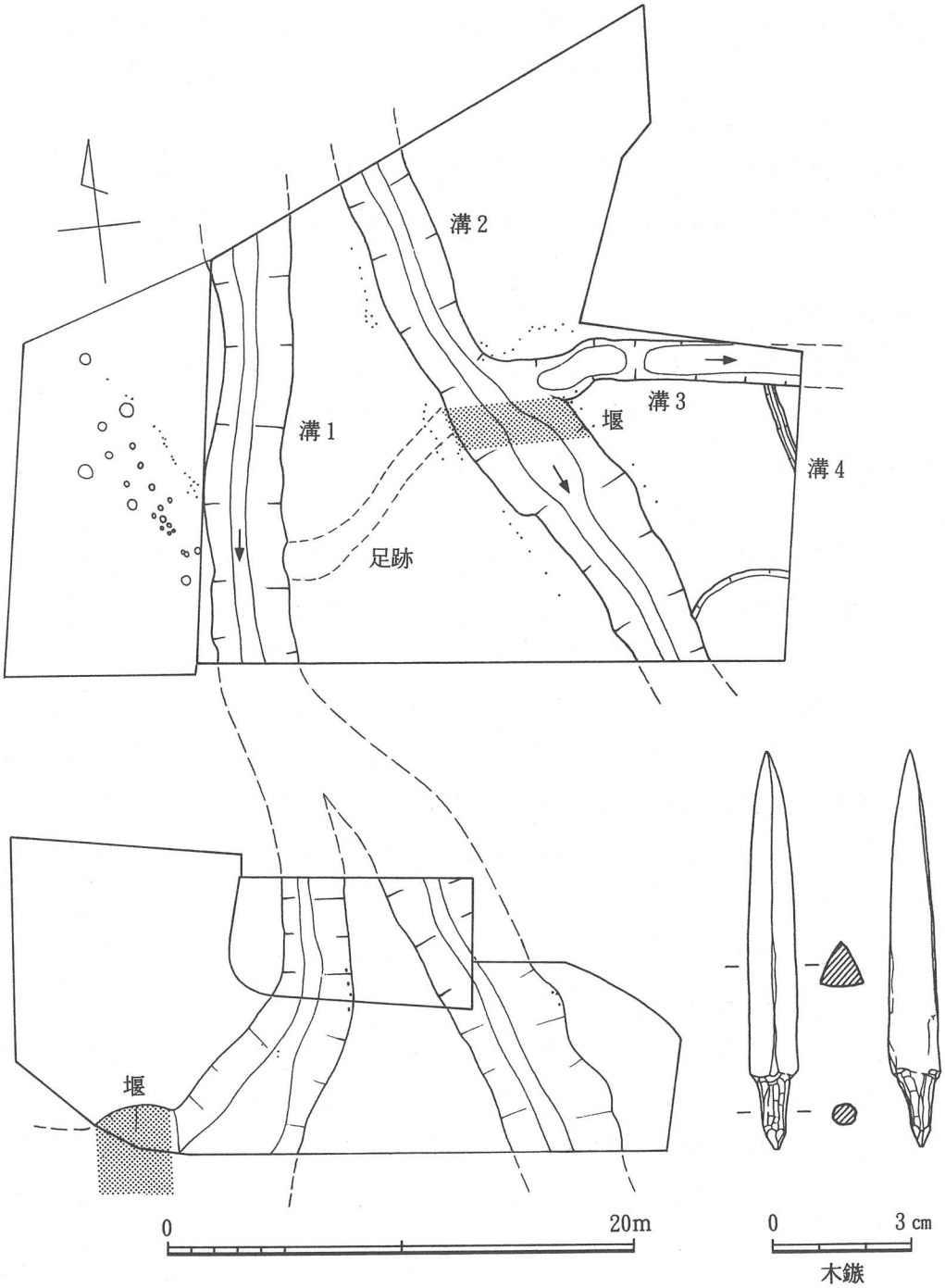


図2　弥生時代遺構面

出していない。

ピット　溝1の西側で十数個検出した。弥生時代と考えているが、時期を確定するにたる資料がない。比較的大型の1個から菱形の石のヤリ先が出土している。

各溝の状況やほかに遺構がないことを考えると、溝1は集落を囲む弥生中期の環溝ないし用水路、溝2は後期の用水路にあたり、集落本体はさらに西側に存在することが考えられる。

また精査中に縄文土器片を検出したため、さらに約0.3m掘り下げ黒褐色粘土層を除去して縄文時代の遺構をさぐった結果、ほぼ全面から後期中頃〜後半とみられる土器片が出土した。しかし出土状況は散漫で、比較的まとまって検出された部分でも1個体に足らず、居住地が付近に存在する可能性を指摘できるにとどまった。なお土器のほかサヌカイトの剥片が数点出土しており、さきの石ヤリも縄文時代に属する可能性がある。

9世紀代の遺構は、調査区東部に集中している。掘立柱建物6棟、柵列2条、大形柱穴4個、井戸1基、轍（わだち）跡のほか多数の柱穴・溝などを検出した。これら遺構の西側は川跡をはさんで水田になっている。

建物1　調査区南東隅で検出した。南北4.5m（3間）、東西4m（3間）の総柱建物で、倉とみられる。

建物2　建物1の北側から検出した。南北3m（2間）、東西4.5m（3間）以上と考えられるが、1と同規模の倉であるかもしれない。

建物3　建物2の西側から、2と建物北辺を揃えて検出した。南北9m（5間）、東西4m（2間）と考えられる。

建物4　調査区北東部で検出した。南北6m（3間）、東西5m（2間）である。

建物5　建物4に一部重複して検出した。南北4m（2間）、東西6.5m（3間）で4より新しい。

建物6　井戸12の西側にある。北側は調査区外にのび、南北3m（2間）以上、東西3m（2間）ある。あるいは2間四方の倉かもしれない。

柵　列　建物5・6の西側で、南北5間分の柵列を2条検出した。

以上の建物は、大きく西に振る建物6をのぞき、柱通りをほぼ真北方向に揃えている。次にふれる大形柱穴群もほぼ同じ方向に揃う。

大形柱穴　建物3の北西側で検出した。南から順に1〜4と呼ぶ。柱穴1と2はともに一辺1.5m、深さ0.5mあり、「貞観永宝」（870年鋳造）がそれぞれ2枚ずつ発見さ

れた。また2には径40㎝、長さ85㎝の柱根がのこっていた。柱穴3と4は当初一辺0.8mほどであったものが、柱の抜き取り作業によって大きくなっている。3では抜いた柱根を抜き取り穴に埋め、元の位置に新しい柱を立てたことが推察された。

これらは、柱穴1・2、3・4がそれぞれ組み合って柱間3mの建築物たとえば「門」になると考えられ、前者は後者の建て替えであろう。

井戸12　調査区北東隅で検出した。方形の掘形内に、曲物を4段重ねた内枠と、小判形の曲物の外枠を納めていた。9世紀初め頃に埋められたと考えられる。

道　路　建物群と川跡との間は幅3mほどの空間地で、大形柱穴付近で南北方向のわだちを2条検出したことから道路であろう。東側のわだちは幅1mあって両側縁は直線状にやや深く、中央は足跡状のくぼみが幾つも重なっていた。西側のわだちは東側よりはっきり残っており、幅1.4m、車輪の厚さ5㎝と判断された。なお東側のものは大形柱穴3を切る一方、同1・2に切られており、3者の前後関係が知られる。

川　跡　建物群の西側では幅10mほどの川跡が検出された。8～9世紀に属する、土馬や記号らしき墨書のある杯片、緑釉耳皿、黒漆塗の銅鈴などが出土している。

水　田　川跡の西側では、ほぼ全面から動物（ウシ？）や人の足跡がみつかった。足跡を検出した面は3層あり、土層観察から「畦」も見いだしていることから、調査区西半部で長期にわたって水田が経営されていたことは確実である。したがって、調査区東部で検出した建物群が、奈良～平安時代初め頃の集落の西端にあたり、その西側には水田がひろがっていたと考えられる。

12世紀代については、当初調査区で建物と多数の柱穴、井戸、溝、墓、水田跡などを検出した。分布状況から、溝で区画された屋敷地と、そのすぐ南側に墓地、そしてこれらの東側一帯には水田が広がっていたことが想定された。

［屋敷地］鍵の手に屈曲する大溝で区画され、東西20m、南北25mある。

大溝に先行する南北溝5が埋没したのちに盛土と整地を行なって建物が建てられており、溝5埋没以前は水田とみられる。内部はさらに溝で区切られ、中央部の屋敷地は15m×17mほどと考えられる。

建　物　東西9.6m（4間）、南北9m（5間）の1棟を検出した。礎石を用いた床張りの建物で、北西に隅入りがある。東・北・西側には建物沿いに小溝が掘られている。

図 3　上田部遺跡当初調査区　遺構概略図

井　戸　4基ある。井戸1・3・4は底に曲物または桶をおき、河原石を積み上げた石組井戸である。おそらく井戸2も同様の構造であったと思われる。1～3は建物北側に集中して検出された。

柵　　西側の屋敷地で東西方向の柱列を3間分、鍵の手に曲がる柱列を5間分見出した。柵あるいは建物であろう。

土坑墓　建物の西入隅部近くで、子供用1基を確認した。その周辺では、焦げた木片や木炭とともに土師皿を数枚～十数枚納めた小土坑が6基みつかっており、火葬骨あるいは胞衣を納めたものと思われる。

焼土坑　大溝のすぐ東側から、径1.5mの焼土坑を検出した。フイゴの羽口1点やスラグなどがみつかっている。

［　溝　］大溝のほか、建物周囲で多数の溝を検出した。

大　溝　幅3.5m、深さ0.3～1.2mの南北溝で、いったん折れて西に15m流れふたたび南へ折れて調査区外へつづく。屋敷地と墓地・水田を区切っており、屋敷地東側では建物に沿うように屈曲し、幅も狭まっている。次にふれる溝5より新しい。その他の溝は、おおむね建物・大溝と同時存在であろう。

溝　5　屋敷地を南北に貫く2段掘りの溝で、幅1.7～2.1m、深さ0.7～0.8mある。北部に2か所、深さ1.4mまで掘り下げられた部分があり、会所のような役目を果たしたものかもしれない。この溝は大半が西側から流入した土砂で埋まったのち、屋敷地の造成に伴って完全に埋められたとみられる。溝中から食器類なかでも瓦器椀が多数出土した。

［墓　地］屋敷地南側に大溝などで四方を画された火葬墓・土坑墓の集中する区域がある。一辺約15mの範囲から、火葬墓2基、土坑墓6基を確認した。いずれも大人を葬ったと思われる規模で、東西方向に直線状に並び、副葬品としてそれぞれ椀や皿などの食器を2～5点程度納めている。

この区域では、井戸も3基検出した。井戸5は大溝より古く、枠が抜かれていた。井戸7は曲物3段を井戸枠とした小さなもの、井戸6は底に曲物を据え、さらに直径1.1mの丸太をくりぬいた井戸枠を重ねたもので、どちらも墓より新しい時期と考えられる。

なお大溝をはさんで墓地の西側は13～14世紀代の屋敷地とみられ、拡張区から

は井戸４基と多数の柱穴が検出された。西側の立体駐車場の調査では同時期の柱穴群と井戸がみつかっているから、それらと一連をなすものであろう。

［水　田］屋敷地・墓地の東側に広がる。土質・平坦さ・足跡などから推定したもので、南側ではとくにウシや人の足跡を多数検出している。畦畔などは検出できなかった。

調査区中央の水田下層には前代の川跡があり、これに沿って南北に３基の井戸を検出した。北側の井戸10は曲物を５段、南側の井戸11は曲物１段を用い、中央の井戸９は容量20ℓほどの木製容器の底を抜いて井戸枠としていた。また調査区南端近くで単独検出した石組も井戸の可能性がある。これらは深さ0.5m程度と浅く、水田に伴うものであろう。

＜所　　見＞

当該地の調査では、奈良時代から中世にかけての集落跡を確認し、これまでの知見を補強したほか、はじめて弥生時代の遺構を検出するなどの成果を得た。以下に要点を列挙する。

・遺跡は沖積地の高まりに立地し、西方の芥川等の堆積作用により奈良時代以前は東側が高く、それ以後転じて、西側が高い現在の地形へ変化したと考えられる。

・弥生時代の遺構については、中期と後期の溝を確認し、それぞれから堰跡や杭列などを検出した。これらの溝は、集落の環溝あるいは用水路と考えられるもので、検出状況から遺跡の西～北部に弥生集落が存在したことが確実になった。

・奈良時代～平安時代初めについては、調査地東部から建物や井戸、門、道路を検出し、とくに道路には「わだち」や足跡がのこっていた。また西部では旧水田面を３面確認した。同面では多数の足跡や畦を見いだし、長期にわたって水田が経営されていたことが判明した。

・平安時代末には大溝で区切られた屋敷地が北西側にあり、南側の一角に墓地、それらの東側には水田が広がっていたことが判明した。屋敷地は川の氾濫で埋没した旧水田を整地して営まれており、整地以前の溝、及び屋敷に伴う大溝からそれぞれ大量の食器類が出土している。

３．府道改良工事に伴う調査の概要

調査は改良工事計画部分100mのうち、キャブ及びカルバートボックスの設置箇所

について、西側と東側各７か所にトレンチを設定して実施した。トレンチは北から西第１～第７、東第１～第７とした。

＜遺構と遺物＞

遺構検出面の標高は、西第１トレンチで8.9m東第７トレンチで8.2mである。全体に北西から南東へ緩やかに傾斜しており、シルトまたは砂礫層からなる。

遺構及び遺物は、東西とも第５トレンチより北側で検出された。遺構としては柱穴若干と川跡がある。なお第６・７トレンチでは、第１～５の遺構面に対応する土層は暗灰色粘土層であり、湿地もしくは水田を思わせる状況であった。

柱　穴　西第２・３・４、東第１・２・３・４トレンチで検出した。とくに西第３トレンチで検出した方形の柱穴は、一辺0.5m、深さ0.5mをはかり、直径25cmの柱根がのこっていた。ただし調査範囲が狭小なため、各トレンチとも、建物として対応関係をもつ柱穴は見いだせなかった。

川　跡　西第５、東第５トレンチでそれぞれ深さ約1.2mをはかる東西方向の川跡を検出している。両トレンチとも川の南岸のみ検出し、川幅は明確でないが、おそらく10mたらずと考えられる。堆積土は砂・シルト・粘土の互層である。各層から８～９世紀代の遺物が多量に出土した。堆積状況などから総合センター用地で検出した川跡の下流にあたると考えられる。

遺物は、遺物包含層及び遺構から、整理箱約15箱分が出土した。全体として10世紀以降の時期のものはごく少数である。うち約８割は川跡堆積層中からの出土品で、８～９世紀代の土器類・木片を主体とし、弥生時代～古墳時代のものを少量含む。また西第４トレンチ包含層では製塩土器片がまとまって出土している。これらのうち、川跡から出土した銅銭「和銅開珎」１点、墨書土器約20点（瓶子１点、他は杯類）、フイゴ羽口１点、木沓片１点、燃えさしのヒノキ割木多数などはとくに注意される。和銅開珎と木沓は、上田部遺跡では今回はじめて出土したものである。なお墨書は、瓶子の底面に記された「五合」（現在の２合にあたる）、「ヨ」４点、「N」２点などが判別できたほかは、破片のため字体等残念ながら不明である。

<所　　見>

調査の結果、以下の点が明らかになった。

①東第１～４トレンチで柱穴及び遺物包含層を確認したことから、府道東側にもさらに集落遺構が広がっていることが予想される。

②東西の第５トレンチで８～９世紀の川跡を確認した。川跡より南側では遺構が検出されず、湿地または水田が想定される状況であり、したがってこの川跡を８～９世紀代の集落南限とみることができる。

③川跡からは大量の遺物が出土し、そのうちには墨書土器や和銅開珎、木沓、割木など律令に則った祭りにかかわるとみられるものを含んでいる。

４．小　　結

これまで遺跡東部には奈良～平安時代、西部に鎌倉～室町時代の集落が判明していたが、平成３年度の２か所の調査で沖積地の複雑な堆積状況に応じた集落の移りかわりが明らかになってきた。具体的には８～９世紀代の集落西限と南限、及び11～14世紀代の集落東限がほぼ明らかになり、さらに遺跡の東側への広がりについても一定の知見を得た。とくに８～９世紀の集落については、昭和45年に庁舎北東側から検出した木簡や馬鍬と、今回の２つの調査区で判明した車やウシの使用、祭祀遺物の出土をあわせみるとき、この集落が先進的な農業技術を保ちつづけていたことがうかがえてたいへん興味深い。

また今回はじめて検出した弥生時代の溝、縄文時代後期の土器の出土状況はそれぞれ、北方約１㎞に位置する芥川遺跡との関連を思わせるものであり、今後の課題となろう。最後に、類例の少ない木製の鏃を紹介しておく。

今回出土した鏃は、全長8.6㎝ある。身の長さは7.1㎝で、断面形は一辺1.0㎝のほぼ正三角形を呈し、茎は長さ1.5㎝、直径0.5㎝の多角柱状（断面はほぼ12角形）で先端は尖っている。身と茎の間には段がある。鋭い刃物で巧みに削り出しており、その刃こぼれらしき条痕もかすかに認められた。

このような木製の三角鏃は、これまで大阪府亀井遺跡、愛知県朝日遺跡の出土例が知られている。亀井遺跡のものは全長6.5㎝、朝日遺跡のものでは全長約7.4㎝をはかり、身の断面形はそれぞれ一辺0.8㎝、1.3㎝の正三角形を呈する。亀井遺跡例では矢柄がのこっており、装着状態が知られた。

これらはともに弥生時代後期に属し、何らかの祭祀に用いられた、大陸系の漢式鏃

を模した「儀器」と考えられている。本遺跡出土例はこの２例とよく似ており、したがって同様のルーツ、あるいは使途を考えることもできるが、木を削って先を尖らせる一番単純な形ともみえ、漢式鏃との関連はただちに判断できないと思われる。

なお大阪府鬼虎川遺跡では、長い円錐状の身をもつ木鏃が、成品・未成品あわせて５点出土している。骨鏃と共通する形態・大きさをもち、石鏃や金属の鏃と用途は違うが実用品とみられている。時期は弥生時代中期である。

古曽部遺跡の調査

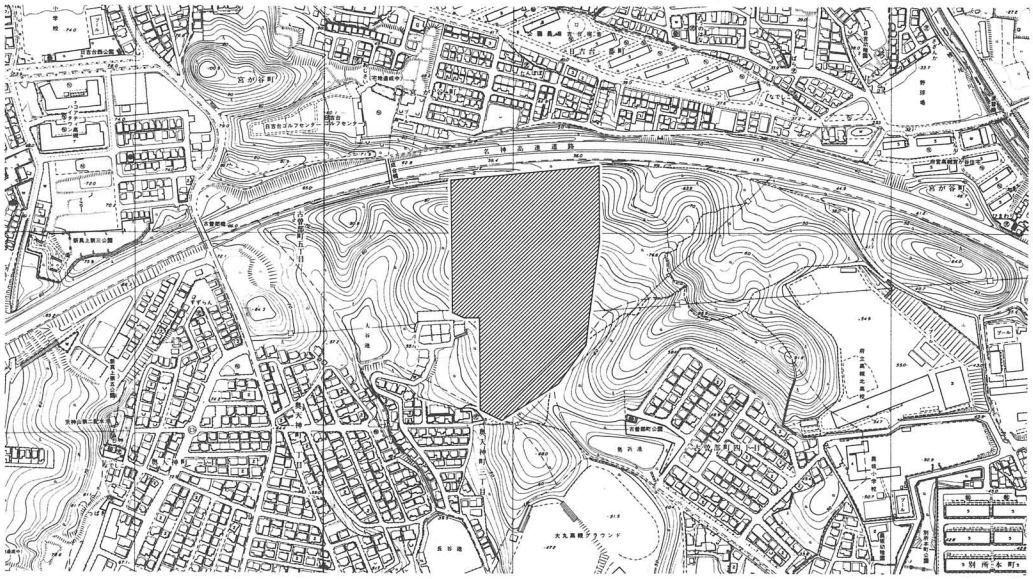
宮崎康雄

古曽部遺跡は、ＪＲ高槻駅の北側にある高槻丘陵（通称天神山丘陵）の主脈から派生した、標高60～90mの丘陵上に位置している。眼下には大阪平野が広がり、遠く六甲山や和泉連山をも望むことができる。周辺には、銅鐸の出土した天神山遺跡をはじめ芝谷遺跡・奥天神遺跡・紅茸山遺跡など弥生時代中・後期の集落が集中している。

遺跡は、小規模な調査や分布調査などで東西・南北とも約300mと推定されていたが、わずかな遺物が知られているのみで、これまで本格的な調査は実施されていなかった。このようななか、大規模な造成が計画されたため、平成３年９月より調査を開始し、平成４年７月に調査を終了した。

遺構は、南に向かって開く谷をコの字状にとり囲むように伸びる尾根上にひろがっている。今回報告する北側尾根（Ⅰ区）と南側尾根（Ⅱ区）では、弥生時代後期初めごろの住居跡・環濠・溝・屋外炉・木棺墓や終末期の古墳（古曽部古墳）などを検出した。以下、弥生時代の主要な遺構について記述する。

住居跡は23棟検出した。これらはⅠ区・Ⅱ区の斜面地に十数棟づつまとまってグループ形成している。多くは斜面上に位置するため、地山をテラス状に造成して平坦面を確保しているが、谷側の盛土は流出していた。また、土留めなどの痕跡も検出で



(1:10000)

図１　調査位置図

きなかった。平面形は多くが一辺４～７ｍの方形ないし隅丸方形であるが、住居６・７・14は直径約５～7.5mの円形を呈している。

屋外炉はⅡ区住居群の北西側で検出した。直径0.35m、深さ0.15mで、壁面は赤変している。底に拳大の石を置き、内部にたまった炭や灰は谷側へかきだしていた。

環濠は幅約５ｍ、深さ約３ｍあり、２度掘り直している。断面の形状は逆台形ないしU字形を呈し、両側の肩は40～60度の急角度で切り立っている。また、堤の一部を切り落とし、排水溝を設けていた。Ⅰ・Ⅱ区尾根の結接地点では、環濠の一部をブリッジ状に掘り残していた。ここでは両側で２個１組となる合計４個の柱穴を検出したことから、橋状の遺構になると考えている。環濠の検出長は約170mをはかり、Ⅱ区を取り囲むように東斜面の中腹を地形に沿って掘削してⅠ区の尾根を分断した後、西側へ屈曲し調査区外へ延びている。その後の調査では、Ⅰ区西方の尾根（Ⅳ区）でもこれに続く環濠を検出し、尾根沿いに大きく巡っていたことが判明している。

Ⅰ区居住区の東西両端には尾根を断ち切るように溝を検出した。幅約４ｍ、深さ約1.4mをはかり、断面は逆台形である。この溝は、居住区を区切るために掘削されたようであるが、居住区形成後に一定の期間を経てから掘削している。

Ⅱ区の尾根上では２基づつまとまった４基の木棺墓を検出した。もっとも西側に位置する木棺墓１は掘形が3.7m×1.8m、深さ0.5mと最大規模である。底は平坦で、西側小口付近を中心に２ｍ×0.8mの範囲で朱を検出した。東側小口付近では、破砕された２点の高杯を底から遊離した状態で検出した。木棺墓２は木棺墓１の北側に並ぶように検出した。全長1.5m以上、幅1.1m、深さ0.2mをはかり、やはり西側で朱を検出したが、断面で見るとこの朱はU字状を呈していた。木棺墓４は住居７の南側に位置する。掘形は2.7m×0.9m、深さ0.6mをはかり、西側では朱を検出した。底からは鉄製品（工具）が１点出土した。西側小口付近では掘形上面で４個体の破砕土器（壺１・器台１・高杯２）が出土した。これらの破砕土器は完形に復元できる個体はなく、必ずどこかを欠いていた。

遺物は現在整理中である。弥生土器や石・鉄製品など数百箱の遺物が出土している。

鉄製品では鉄鏃２点、鉄斧２点のほか、刀子・ノミ・用途不明品などが４点出土した。鉄鏃は２点とも柳葉式で11は住居10・12は環濠より出土した。鉄斧７・８は板状鉄斧である。７は全長18㎝、刃幅約６㎝、厚さ0.9㎝、重量は400ｇである。弥生時代の鉄斧では、芝谷遺跡出土品に次ぐ大きさである。

石製品は、弥生後期初頭に営まれた集落であることからか出土量は少ない。打製石

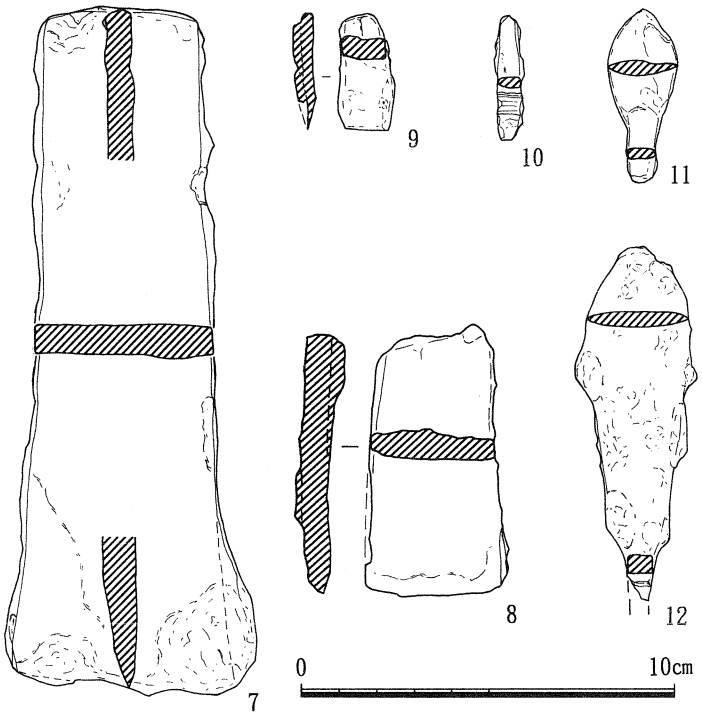


図3　鉄製品実測図

住居2(7),住居6(9),住居10(11),木棺墓4(10),環濠(8・12)

器は住居7より短剣が1点出土した程度である。ただ、東側のⅢ区では剥片がまとまって出土する住居が1棟だけあることから、集落内でまだ打製石器が製作されていたことは確実である。磨製石鏃は未製品を含め4点出土した。住居1では石包丁を研ぎだした未製品（15）が出土している。石斧では太型蛤刃石斧3点環状石斧1点の合計4点ある。いずれも折損後、敲打具に転用している。その他の遺物としては、粘板岩片（17）・砂岩製の砥石（18)、叩き石が十数点出土している。

今回の調査で、古曽部遺跡は弥生時代後期初頭に営まれた集落であることが判明した。検出した2か所の居住域はⅠ区12棟（約2200㎡)、Ⅱ区11棟（約2500㎡）とほぼ同規模となっている。両者はほぼ同時期に出現したとみられ、円形の住居はともに尾根上に建てられるなどの共通点がある。遺物からは特別に格差というべきものは認められないが、環濠の内と外、墓の有無などの相違点がある。特に木棺墓は古曽部遺跡の中ではこの4基しか存在せず、しかも集落内では最も標高の高い場所を選んでいること、数少ない平坦面であるにもかかわらず住居を建築せずにあえて墓域としていることなどから、集落内での被葬者の地位を反映している可能性がある。また、この木棺墓は居住域に接していることや破砕土器を供献する点注目に値する。

集落の立地から見ると、各居住区は南に延びる谷を意識して展開しているようであ

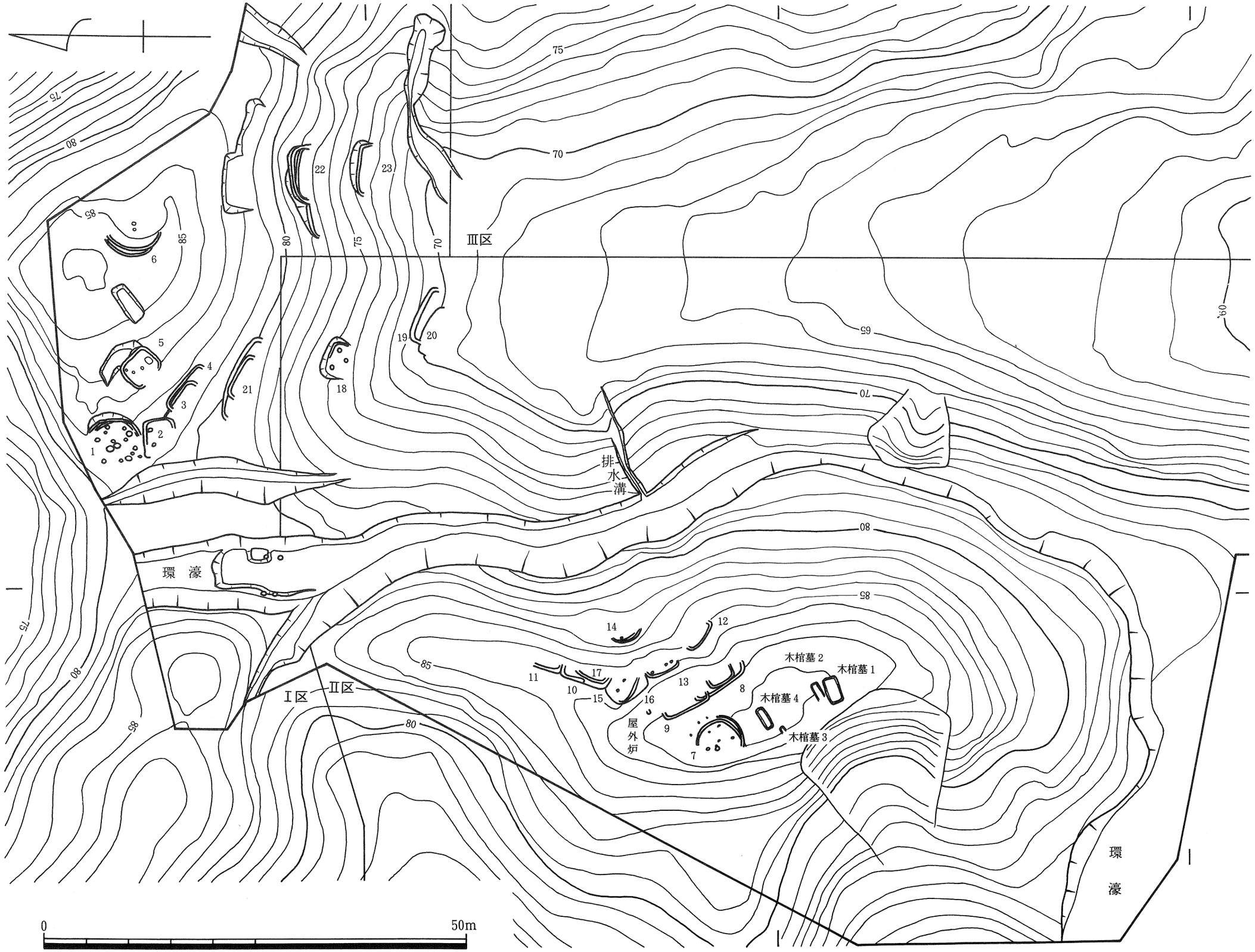

Ⅲ区
Ⅰ区
Ⅱ区
環濠
排水溝
屋外炉
木棺墓1
木棺墓2
木棺墓3
木棺墓4
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
75
70
65
60
80
85
0
50m

図2　Ⅰ・Ⅱ区平面図

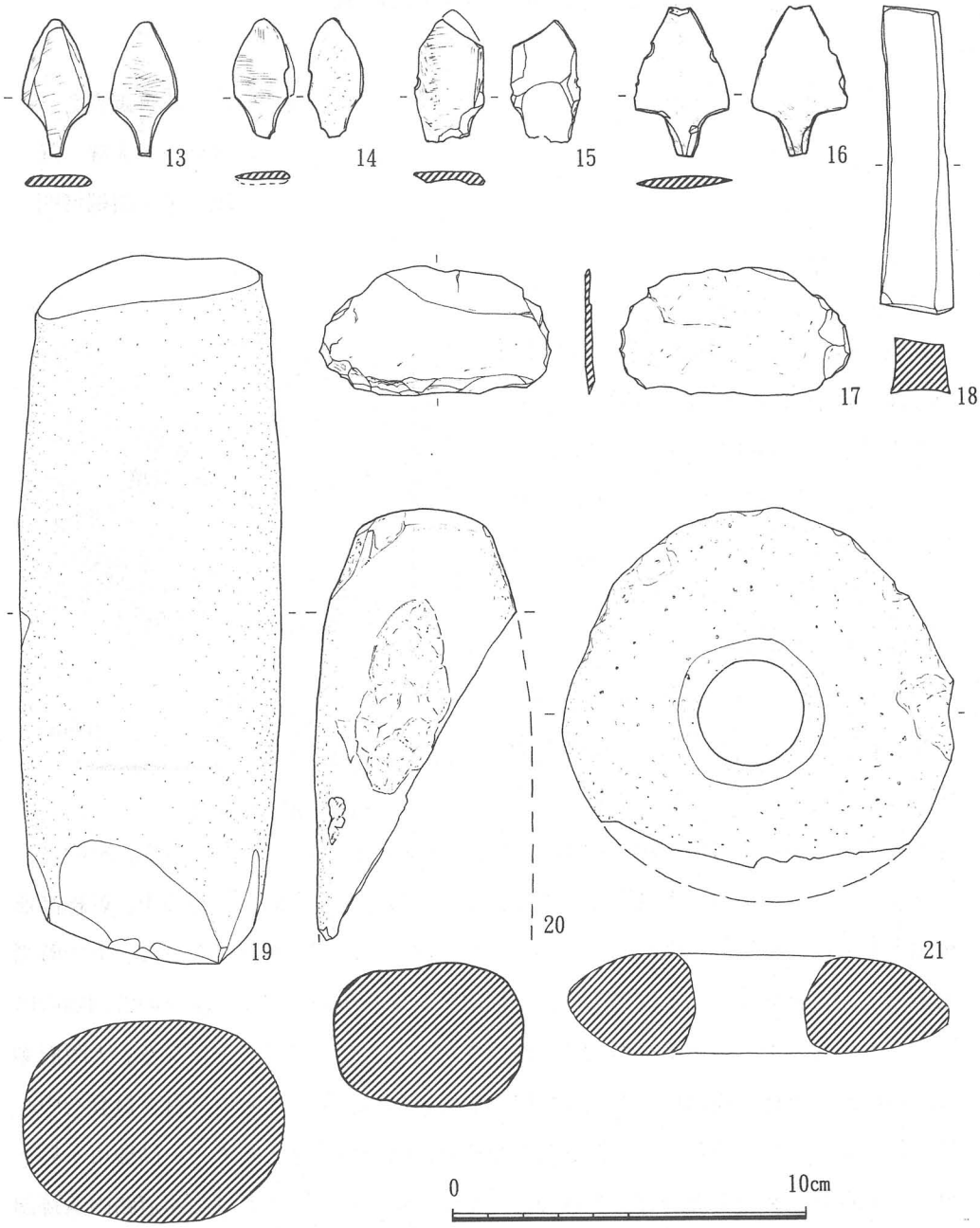


図4　石製品実測図

住居1（13・15）、住居2（14）、住居6（18）、住居21（20）、環濠（16・19・21）

る。この谷を下っていくと、1.5㎞で安満遺跡（標高約10m）に至ることから両者の関係を指摘できる。いずれにせよ住居や墓、これをとりまく環濠などを同時に検出した今回の調査は、高地性集落を研究するうえで恰好の資料といえる。

梶原古墳群の調査

名神高速道路内遺跡調査会
冨成哲也・大塚　隆
川崎文子・川端博明

1．はじめに

梶原古墳群は、高槻市の東部、古生層から成る丹波山地の南端に展開している。この古墳群の実態はこれまでの分布調査等でも不明な点が多く、ましてや、本格的な発掘調査のメスが入っていない地域として、北摂の古代を考える上でも大きな課題であった。

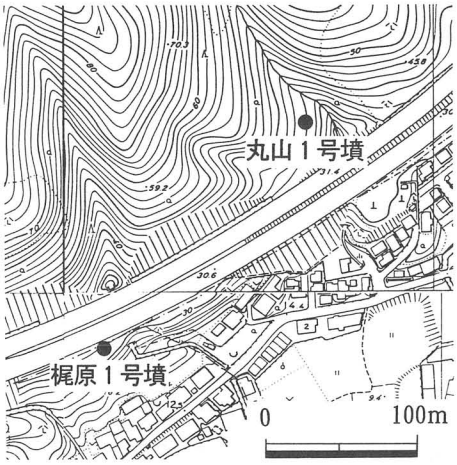


図１　調査位置図

梶原古墳群内には、昭和39年大阪府の北部を貫ぬく名神高速道路が、道路交通体系の未来を築くとして期待を但って開通し、今日では、日本経済の大動脈の地位を不動のものとしたのである。その後、モーターリーゼィションの拡大と発展は、予想をはるかに上回る勢いの中、幹線高速道路としては、慢性的な渋滞におちいり、早急な対策が望まれるに至った。その解消策として、名神高速道路々線のうち、京都南インターから吹田インターの27.4㎞の区間に上・下線各１本の車線を増設し、渋滞を解消しようとすることになる。大阪府側17.6㎞の上・下線増設に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、大阪府教育委員会を中心に文化庁並びに日本道路公団と協議を重ねる中、吹田市を除く茨木市・高槻市・島本町の各教育委員会と大阪府教育委員会は、平成２年11月１日に名神高速道路内遺跡調査会を設立、事務所を高槻市井尻１丁目17－１に置いて、名神高速道路改築事業地内に包蔵する埋蔵文化財等の文化財調査を実施することになった。実質的な事務局は大阪府教育委員会内に置き、高槻市教育委員会をはじめとする２市１町は、調査担当職員を派遣し、同調査会を構成、本格的な文化財調査の実施にあたることとした。調査は限られた範囲の中、名神高速道路建設後、はじめて学術調査が開始されたのである。

2．主な遺構

調査は高槻市の梶原地区と島本町の水無瀬地区の調査可能な場所から行う。ここでは、高槻市梶原地区について報告するが、詳細については同調査会がまとめる報告書にゆだねることとする。

梶原古墳群は、現在、高槻市教育委員会が周知する遺跡として、梶原古墳群、丸山古墳群、萩ノ庄古墳群、梶原寺跡並びに梶原寺下層遺跡さらに梶原瓦窯跡、萩ノ庄瓦窯跡等々の存在を認知している。平成３年度の調査は、このうち、梶原古墳群と丸山古墳群の調査である。

（A） 梶原古墳群

分布調査により発見された梶原１号墳は、丘陵端の中腹に営まれた直径約25mの円墳で、幅約５m、深さ約1.2mの周溝を丘陵側にめぐらしている。石室奥壁側墳丘内には暗渠状の排水溝と考えられる墳丘内施設を認める。内部主体は左片袖式の横穴式石室を有する古墳である。石室の規模は、玄室幅約2.5m、玄室長約4.0m、羨道幅約1.3m、羨道長約6.0mを測り、玄室はやや胴張りの形状をもつ。石室内には、玄室ほぼ中央、石室長軸に組合式家形石棺を検出する。石棺は全長約2.0m、幅約0.9mを測り、棺蓋は奥壁及び右側壁側に分散していた。棺内には何ら副葬品はみられない。石材は二上山産の凝灰岩製で、石材厚は約15cmを測る。

石室内からは、銅鏡、馬具、鉄鏃、耳環、ガラス製丸玉、須恵器、土師器等多数が出土した。なかでも、馬具は鉄地金胴張りの豪華なもので、鞍金具２、鏡板２、杏葉５、飾り金具２を検出する。これら馬具の大半は、玄室左奥壁部分の床面で検出した。一方、玄室左側壁側から出土した杏葉は、双葉剣菱形杏葉で、その遺存状況は良好なものである。表面には、金メッキが残り、裏面には布と思われる痕跡と木片の付着を

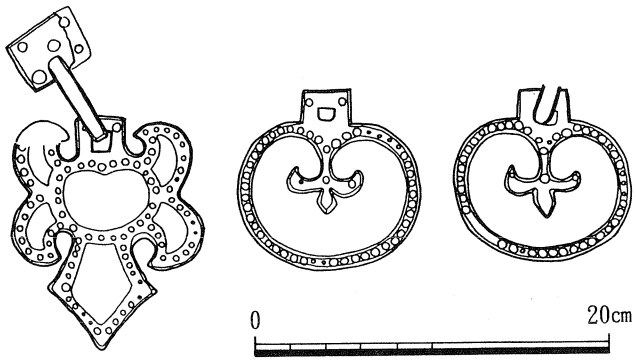


図２　梶原１号墳出土杏葉

認める。出土している他の杏葉とは一定区別されたものとして箱等に納められた可能性もあると考えられる。

（B） 丸山古墳群

丸山古墳群は、梶原古墳群の谷のへだてたすぐ西側の丘陵端に位置する。古墳は名神高速道路の南に接して6世紀後半築造の円墳1基が発見された。

墳丘は名神高速道路建設時に、すでに削り取られており、その規模は不明である。しかしながら、石室の形状はよく留めていた。

石室は左片袖式の横穴式石室で、玄室の一部が高速道路内に入り込んでいた、その規模は、玄室幅約1.3m、玄室長約3.4m、羨道幅約0.9m、羨道長約1.9mを測る。玄室床面と羨道床面には段差が認められる。玄室内には、棺台に使用されたと考えられる台石とともに鉄釘3点を検出する。その他、耳環、碧玉製管玉、滑石製紡錘車、須恵器（提瓶、台付壺、瑳、杯、高杯、有蓋高杯）等々が出土している。ほぼ現位置を留めていると考えられる。

なお、本古墳の南西側からは、形象埴輪片や5世紀末頃に属すると思われる須恵器・甕などが発見されていることから、周辺には時期の遡る古墳の存在が考えられる。

3．ま と め

梶原古墳群、丸山古墳群における今回の発掘調査では、多くの成果を得た。ここでは、報告し得なかった梶原古墳の東丘陵上の調査でも5世紀中頃～6世紀末にかけての方墳4基と7世紀前半以降の竪穴式住居6棟、掘立柱建物跡5棟、8・9世紀代の土坑墓・蔵骨器等々を検出している。少くとも、今回の調査で発見された古墳は4基、出土遺物からみて古墳の存在を想定することが可能な遺構が3基あり、名神高速道路建設にともない消滅したと思われるものを除く総数は7基を数える。また、各古墳の所属時期の支丘陵毎の分布や今後実施されようとする古墳等をも合せ検討すると、高槻市教育委員会が発行している遺跡分布図の個別呼称に若干の疑問をおぼえるとともに、梶原・萩ノ庄地区の平地に突出する各丘陵を支丘陵の認識の中で、一つの古墳群として全体をとらえる必要があろうと思う。遺跡分布の設定作業の中で結論を出したいと考えている。古墳群のとらえ方は以上のべたとおりである。

梶原古墳群、丸山古墳群ともに各1基の発掘調査の結果は、ともに6世紀後半に築造された古墳である。出土遺物をみると、梶原古墳には豪華な馬具に加え、組合せ式家形石棺を埋葬に使用していること、一方、丸山古墳には、紡錘車の副葬品がみられ

ることや、眼下に広がる淀川との間に展開する上牧遺跡及び梶原南遺跡、歴史的には、その後展開する梶原寺跡等の実態と桧尾川以西の各古墳群との比較からして、これら古墳の被葬者達は、淀川に展開したであろう政治的、経済的活動によって成立した豪族と考えるのが妥当と考えられる。今回の調査結果は、その後の歴史的展開、すなわち、梶原寺の成立に大きな石ずえになったものと考える。これは、同調査会が引続き実施する梶原・萩ノ庄地区の調査でさらに実態が明らかになるものと確信する。

名　称	法　量	出土場所
珠文帯鏡	直径約9.0cm　紐部約1.3cm	玄門部付近第1面
双葉剣菱形杏葉	縦約12.0cm　横約5.5cm 飾り部約4.0cm	玄室内第1面石棺左側
楕円形杏葉	縦約7.0cm　横約10.5cm	玄室内石敷床面上 石棺と奥壁の間左側
〃	縦約7.0cm　横約10.5cm	〃
〃	縦約7.0cm　横約10.5cm	〃
〃	縦約7.0cm　横約10.5cm	〃
楕円形鏡板	縦約10.0cm　横約11.0cm 引手約15.0cm	〃
〃	縦約8.0cm　横約10.5cm 引手約8.0cm	〃
前輪磯金具	縦約15.0cm　横約8.5cm	〃
後輪磯金具	縦約13.0cm　横約12.0cm	〃
辻金具	縦約6.0cm　横約6.0cm 厚さ約1.5cm	玄室内第1面石棺左側
雲珠	縦約7.0cm　横約7.5cm 厚さ約4.0cm	〃

表1　出土金属製品一覧

Ⅱ．指定文化財

1．芥川宿絵図

平成３年４月24日に、市文化財保護審議会より答申を得ていた芥川宿絵図は、平成３年５月17日付けで、市指定文化財となった。

〈種　　別〉　有形文化財（古文書）

〈名　　称〉　芥川宿絵図　１巻

〈所 在 地〉　高槻市芥川町三丁目16番19号

〈所 有 者〉　平井利一（高槻市芥川町三丁目16番19号）

〈形　　状〉　全長280.0cm×51.5cm
紙本著色、軸装仕立て

〈時　　代〉　江戸時代（享保19年・1734年）

〈指定理由〉　本絵図は、近世中期の芥川宿の状況をよく伝えており、また一軒一軒ここまで詳細に記された宿場絵図は、関西では他にない貴重な資料である。

〈概　　要〉　芥川宿絵図は、「享保十九寅四月三日出之」とあるように、高槻藩に提出したとみられ、享保十九年（1734）の芥川宿の状況を伝える貴重な絵図である。

さて芥川宿は、京都から西日本に向かう西国街道の宿駅として栄え、鎌倉時代には宿が形成されていたと考えられ、室町時代には皇室領として内倉寮の率分関がおかれ芥川城が存在していたことが知られる。織田信長によって「芥川之市場」は焼かれたこともあったが、次第に復興し、徳川時代になって街道の整備がなされるとともに、脇街道山崎通（西国街道）の宿駅として発展した。この山崎通伏見から山崎に入り、芥川・郡山・瀬川などの宿を経て西宮で山陽道とつながる街道であった。西日本の大名は、大坂を経由せず、近道である山崎通を利用するものが多かった。したがって、芥川宿も山崎・郡山の間の宿で大名は休憩するだけであったが、かなりの町場として繁栄した。近世初期には政治的に往来する人も多かったが、中期には減少し、定着する。天保期の『宿村大概帳』には町並東西９町余、人口1150・家数253、本陣一軒・人馬継立問屋場があり、脇

本陣はなく、旅籠屋は大７件、中11件、小15軒で山崎通の宿駅と比べてもかなり繁栄していたことが知られる。

芥川宿の絵図は、近世中期の芥川宿の状況を示す貴重な資料である。同種のものとしては「山崎通分間延絵図」があるにすぎない。本図は東南端の部分が一部欠けているものの、芥川宿の寺院・本陣・一里塚などとともに各家と名前を記している。

この特色は次のようである。ここには全体で157軒と殿垣内７軒の164軒の記載があり、他に寺院や高札場・一里塚などが描かれている。まず通りに面した家については126軒描かれている。そのなかで屋号を記したのは、本陣河内屋吉兵衛と原屋・葉屋・菊屋・藤屋・大坂屋・米屋など12軒、また名字のある長山仁兵衛がいるが、他は名前のみである。なぜ屋号があるのかわからないが、あるいは旅籠屋かもしれない。そのうち借家は９軒であるが、本陣の近くにもある。これには名前を記していないが、それは借家人だからか、当時空家であったためかわからない。通りから入った所にも家があり、23軒描かれている。これには郡九兵衛・同八右衛門といった家があるが、かなり大きな家も多い。なかには土井道を入った南側や本陣の前を北に入ったところに７、８軒の集落がある。また教宗寺門前にある借家は、長屋の３軒のみだが、これは借家建築であるとみられる。本図は町人の家持のみを記したのであった。家屋は平入りの家で、妻入りは２軒であるが、これも町並の端にあって、立地条件のためにこのような形式をとったとしてよいから、平入りが普通であった。屋根の描きかたは４種あり、それによって本陣・教宗寺・郡氏の家などは瓦葺き、町家は藁葺きと考えているが、おなじ藁葺きとみられる殿垣内の家とは記載が異なる点は、なぜかわからない。保留しておきたい。街道の様子は、芥川には通常の土橋がかかっており、他の溝川には５つの石橋がかかっている。道は東部分の一里塚のところで北に折れ、また東に折れている。これは見通しを効かさないように屈曲させたものであった。一里塚は道をはさんで東西にあり、塚となっていて、上に樹木が１本植えているが、現在は東のみが残って、大阪府指定顕彰史跡となっている。また山崎

通からの道は、大坂道・服部道・高槻道があり、他に殿垣内・教宗寺への道や土井道などがみられる。

以上、述べたように、本絵図は山崎通芥川宿の近世中期の状況を示す貴重な資料である。

2．今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡

新池遺跡は平成２年11月16日に文化財保護審議会より答申を得、平成３年７月20日付けで史跡今城塚古墳に地域を追加させ、今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡となった。

〈種　　別〉　史　跡

〈名　　称〉　今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡

〈所　在　地〉　高槻市上土室１丁目１番16号

〈概　　要〉　今城塚古墳は、二重の周濠を有する墳丘全長190mの巨大な前方後円墳として、昭和33年に史跡に指定された。この古墳の西北約１km の低丘陵地に埴輪製作地である新池遺跡がある。この遺跡は、東西120m・南北240mの低丘陵地とその西側谷部に広がり、面積は約４万㎡となっている。この新池遺跡は埴輪窯・工房・工人集落がセットとして発見されたこと、大王陵を含む古墳群と埴輪窯の関係を明確におさえることができるなど、当時の埴輪生産の実態が具体的にとらえられる点で学術的に極めて高い価値を示している。

Ⅲ．文化財保護啓発事業

1．文化財現地公開講座

・平成３年12月14日

慶端寺

「慶端寺菩薩座像について」

・平成４年３月11日

安岡寺

「安岡寺千手観音座像と藤原仏」

2．文化講座

『歴史の散歩路－万葉の里コースを訪ねて』（参加延べ50人）

・平成４年３月24・26日

万葉の里コース散策

・平成４年２月４・７・12日

『歌舞伎の楽しさ』

舞台鑑賞　　『仮名手本忠臣蔵』

3．現地説明会・講演会

・平成４年１月12日（参加約2800人）

「古曽部遺跡」

『古曽部遺跡からみた弥生時代の戦争』

佐原　眞（奈良国立文化財研究所　研究指導部長）

4．歴史講座

・平成３年11月18・21日

「大津京とその時代」講座と現地見学（参加人数延べ132人）

18日　「大津京とその時代」

林　博道（滋賀県文化財保護協会　専門員）

21日　「大津京周辺を巡って」

吉水真彦（大津市歴史博物館　学芸員）

［行程］

大津市歴史博物館→大津宮→皇子山古墳→近江神宮→日吉大社

5．説明板の設置

平成３年度は次表の５箇所に説明板を設置した。なお大型説明板は縦80㎝横120㎝、中型説明版は縦60㎝横80㎝である。

名　　称	設　置　場　所	サイズ	設　置　理　由
大蔵司遺跡	府立芥川高校北側（浦堂１丁目）	大　型	新　　設
芥川廃寺	市道郡家新町46号線（郡家新町）	中　型	新　　設
郡家今城遺跡	府立三島高校北西隅（今城町）	〃	新　　設
宮田遺跡	春日神社南側（宮田町３丁目）	大　型	新　　設
津之江南遺跡	津之江小学校正門南側（津之江北町）	〃	新　　設

設置場所一覧表

6．歴史の散歩路整備

歴史の散歩路の普及をはかるため、阪急富田駅南側に磁器板を使用した大型説明板を設置し、７本の標柱を補充、45か所で塗り替えを実施。

7．刊行物

『遺跡ガイド』（平成３年12月刊）

市内の遺跡についてわかりやすく解説したビジュアルなガイドブック

本年度はつぎの４遺跡を刊行。Ａ５版、本文６ページ（新池遺跡は10ページ）

「塚原古墳群」

「新池遺跡」

「郡家今城遺跡」

「宮田遺跡」

8．ふるさとビデオライブラリー

生活文化の急激な変化のなかで失われつつある町並みや市内に残された民家を映像で記録保存するため、昨年度に続き第二作を製作した。

「高槻の民家と町並み」

9．市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数　4,843人（延べ　83,320人）

10．市立歴史民俗資料館入館者数

総数　13,709人（延べ　92,176人）

Ⅳ. 研究ノート

嶋上郡衙「正倉」についての覚書

高橋公一

昭和61年、郡衙西南域の調査で、掘立柱建物群が発見された。この建物群は、平成2年度、および4年度の調査を経て、その全貌が明かとなった。特に8世紀後半の総柱建物4棟を含む建物群は、整然と配置され、空間地を介してひとつのまとまりを形成していることなどから、新期郡庁院に伴う「正倉」と考えるに到った（「嶋上郡衙跡（45－L地区）の調査」『嶋上遺跡群17』参照）。

本稿では、他の正倉と比較や、先学が指摘した事柄を援用することにより、嶋上郡衙「正倉」の特質を析出し、その性格に迫ろうとするものである。

〔建物群の位置と配置〕

嶋上郡衙「正倉」は、郡衙域の西南部に位置し、整然とした配置で、ひとつのまとまりを形成している。倉庫令では、「凡倉。皆於二高燥処一置之。側開二池渠一。去レ倉五十丈内。不レ得レ置二館舎一」と規定されている。「高燥」の地に立地せず、「池渠」がないなど、これに反するようであるが、西側の自然流路と東側の無遺構地帯によって区画されて設置されており、「五十丈内」はともかく、他の館舎と混在しない点で、この規定を遵守しているといえる。立地については、郡衙の南側をはしる山陽道を意識した可能性が高い。これは、後述するように南側に開いている建物群の配置によってもうかがえる。物資の集積運搬に便利なように、街道の近くに設定したと考えられる。福島県関和久遺跡（陸奥国白河郡衙）では、阿武隈川の水運を利用しやすいように、南側の低地に正倉をおいたと考えられており（文献3）、嶋上郡衙「正倉」でもこれと同様に、実際の運用を考慮にいれた立地といえよう。

さて、建物の配置をみると、ある掘立柱建物のいずれかの柱筋は、他の掘立柱建物の柱筋あるいは中軸線に対応しており、計画的な設計がなされていたことがうかがえる。さらにＳＢ１、ＳＢ３、ＳＢ７はほぼ等間隔の空間地をはさんで対峙している。建物はこれらを基点として南北に連なっている。こうした空間地をはさんで小群ごとに整然とならぶ配置は、郡衙正倉に一般的にみられるものである。この空間地は物資の出納・虫干しなどの作業場として利用され、また火災の類焼防止空間としての役割

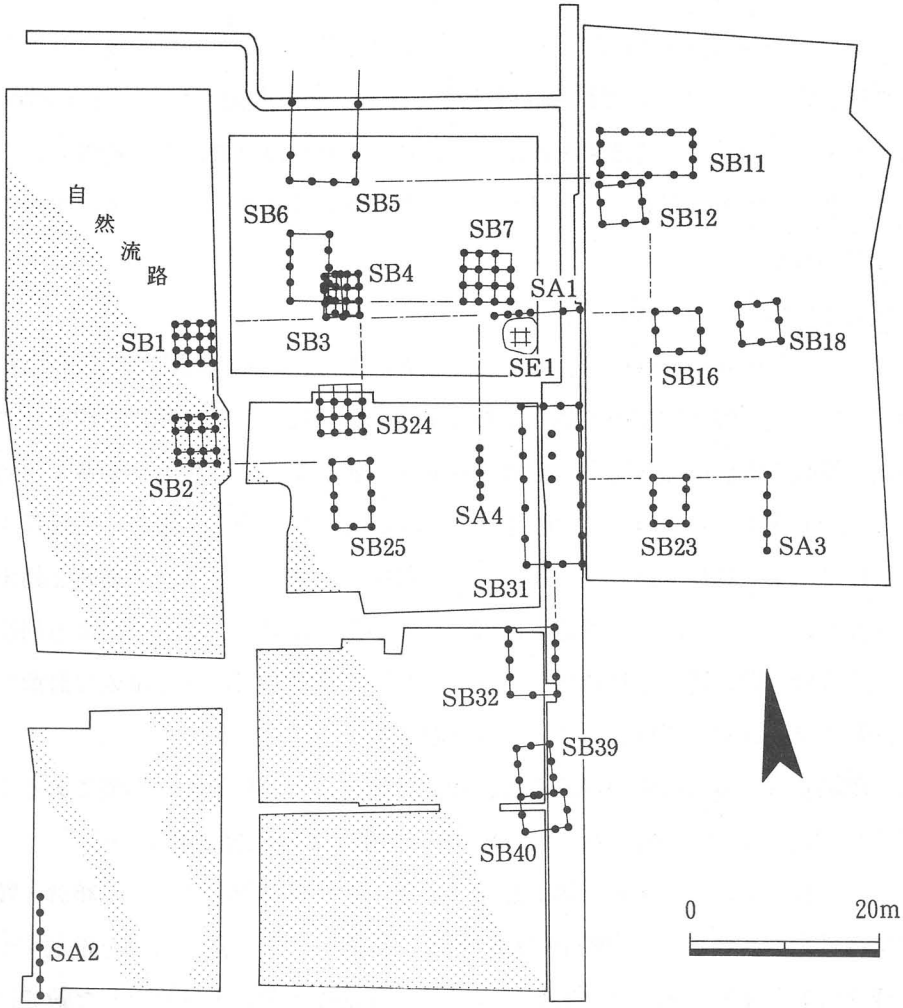


図１　嶋上郡衙「正倉」の遺構概念図

があったと指摘されている（文献２）。これに加えて、嶋上郡衙「正倉」では、この空間地が南北に長く、南に開放していることから、通路としての機能を重視していたということを指摘しておきたい。こうしてみると、嶋上郡衙「正倉」は山陽道の利用を第一に考慮して計画されたとみることができる。

〔倉庫の規模と構造〕

嶋上郡衙「正倉」で検出した倉庫とみられる総柱建物は、いずれも３間×３間（１棟は推定復元）であり、郡衙正倉遺構のなかではこの構造の建物が４間×３間のものに次いで多いという指摘（文献４）に合致している。一方、面積は30㎡以上の例が多い（文献１）のに対し、ＳＢ１～４、７、24の面積の平均は20.44㎡である点が異なっている。

また、側柱建物のなかに、桁行と梁行の長さがほぼ等しいものがある（ＳＢ12・16・18)。これらも総柱建物の倉庫に準じた収蔵施設と思われる。さらに長方形の平面をもつ側柱建物でも、屋とよばれる収蔵施設であることが指摘されている（文献１)。ＳＢ31は北側の３間について床束を検出しており、これが屋にあたる可能性もあろう。あるいは、唯一の東西棟であるＳＢ11を除いた南北棟の建物すべてを、屋とすることも可能と思われる。

〔何が収納されたか－穎と穀〕

古代における稲の収納形態には、穎と穀の二者があった。穎は稲を刈り取り束ねた状態の稲穂であり、穀は穎稲を脱穀した籾粒をさす。穀には、永年貯蓄を建前とする不動穀と、飢饉や疫病に際して高年齢者や貧窮者に穀を支給するために備蓄する動用穀があり、それぞれ「不動倉」、「動用倉」に蓄えられた。一方、穎として保管されるのは公出挙による利稲であり、「穎倉」や「穎屋」に蓄えられた。不動穀と動用穀は備蓄を基本とし、本来国司の管轄下におかれていたのに対し、公出挙による利稲は、地方官衙の維持活動経費や中央政府に貢進する物資の調達費用などの重要な財源であり、日常的に支出され、活用されていた（文献２)。

また、収納する倉庫にも違いがみられ、穎倉は穀倉よりも相対的に小型であること（文献４)、あるいは穎は屋に収納されたこと（文献２）も指摘されている。

ここで、これまでにとりあげた嶋上郡衙「正倉」の特質を想起すると、穎倉・穎屋に見事に符号する。つまり、山陽道に近い場所に位置し、南に向く通路を設定するのは、物資の出納が頻繁であったと解釈でき、この収納物は備蓄を目的とした穀ではなく、日常的に支出された穎の可能性が非常に高いといえる。また倉がやや小さめであることや、屋の存在が想定できることも、こうした推定を補強するものである。

〔まとめの課題〕

今回明らかになった嶋上郡衙「正倉」は、その立地や建物配置、規模などから、郡衙の日常的な財源の穎稲を収納する穎倉・穎屋である可能性を指摘した。しかし、動用穀や不動穀のような備蓄穀を収蔵する施設も存在したはずであり、今後の周辺での調査が期待される。しかし、郡衙正倉には多種の穎穀をおさめた倉庫が混在する例と、単一の用途の穎穀を収納する場合があることが指摘されており（文献２)、それらは、全く別の地域に存在していた可能性もある。また、正倉を郡内に分置していた例（松江市団原遺跡・意宇郡山城郷衙）もある。これらを今後の課題とし、嶋上郡衙の構造を解明していきたいと思っている。

番　号	種　類	桁　　行	梁　　行	方　　位	備　　考
ＳＢ１	総	3間・ 4.5m	3間・ 3.9m	Ｎ－５度－Ｅ	柱根、礎盤遺存
ＳＢ２	総	3間・ 5.2m	3間・ 4.2m	Ｎ－５度－Ｅ	
ＳＢ３	総	3間・ 4.5m	2間・ 3.6m	Ｎ－５度－Ｅ	柱根遺存
ＳＢ４	総	3間・ 4.5m	3間・ 3.6m	Ｎ－９度－Ｅ	３より新
ＳＢ５	側	3間・9m以上	3間・ 7.0m	Ｎ－９度－Ｅ	
ＳＢ６	側	4間・ 7.2m	1間・ 4.2m	Ｎ－９度－Ｅ	３・４より新
ＳＢ７	総	3間・ 5.4m	3間・ 5.1m	Ｎ－９度－Ｅ	
ＳＢ11	側	4間・ 9.8m	3間・ 4.7m	Ｎ－８度－Ｅ	
ＳＢ12	側	2間・ 4.5m	2間・ 4.3m	Ｎ－５度－Ｅ	
ＳＢ16	側	2間・ 4.7m	2間・ 4.4m	Ｎ－５度－Ｅ	
ＳＢ18	側	2間・ 4.3m	2間・ 4.3m	Ｎ－３度－Ｅ	
ＳＢ23	側	3間・ 5.0m	2間・ 3.6m	Ｎ－６度－Ｅ	
ＳＢ24	総	3間・ 5.3m	3間・ 4.4m	Ｎ－５度－Ｅ	柱根遺存、桁行は推定
ＳＢ25	側	4間・ 7.2m	2間・ 3.9m	Ｎ－５度－Ｅ	
ＳＢ31	側	6間・17.1m	3間・ 6.3m	Ｎ－５度－Ｅ	北３間分に床束あり
ＳＢ32	側	4間・ 7.2m	2間・ 5.0m	Ｎ－５度－Ｅ	
ＳＢ39	側	3間・ 5.4m	2間・ 3.7m	N-1.5度－Ｅ	
ＳＢ40	側	3間・ 4.8m	2間・ 3.7m	N-0.5度－Ｅ	

（総－総柱建物、側－側柱建物）

嶋上郡衙「正倉」の掘立柱建物

番　号	規　　模	長　　さ	柱間寸法	方　　位	備　　考
ＳＡ１	6間（推定）	9.0m	1.3～1.5m	Ｎ－95度－Ｅ	東西柵
ＳＡ２	6間	10.7m	1.7～2.0m	Ｎ－５度－Ｅ	南北柵
ＳＡ３	4間	8.4m	2.1m	Ｎ－８度－Ｅ	南北柵
ＳＡ４	4間	5.5m	1.75m	Ｎ－５度－Ｅ	南北柵

嶋上郡衙「正倉」の柵列

参　考　文　献

文献１　山中敏史・佐藤興治『古代の役所』1985

文献２　山中敏史「古代の倉庫群の特徴と性格」『クラと古代王権』1991

文献３　松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』1983

文献４　山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』1984

丘の上のムラ

－古曽部遺跡の調査から－

宮崎康雄

高槻市街の背後には、高槻丘陵という標高30～100mの洪積丘陵がひろがっている。基盤層が大阪層群というもろい地層であるために谷が各所に刻まれ、なだらかな尾根に比して急斜をなしている。

通称天神山丘陵とよばれるこの丘には、銅鐸や分銅形土製品の出土した天神山遺跡（Ⅱ～Ⅳ期）をはじめ、慈願寺山遺跡（Ⅳ期）、奥天神遺跡（Ⅴ期初頭）、芝谷遺跡（Ⅴ期初頭）、古曽部遺跡（Ⅴ期初頭）、紅茸山遺跡（Ⅴ期後半）などの弥生集落が集中している。このうち奥天神・芝谷・古曽部の３遺跡は存続時期もほぼ等しく、たが

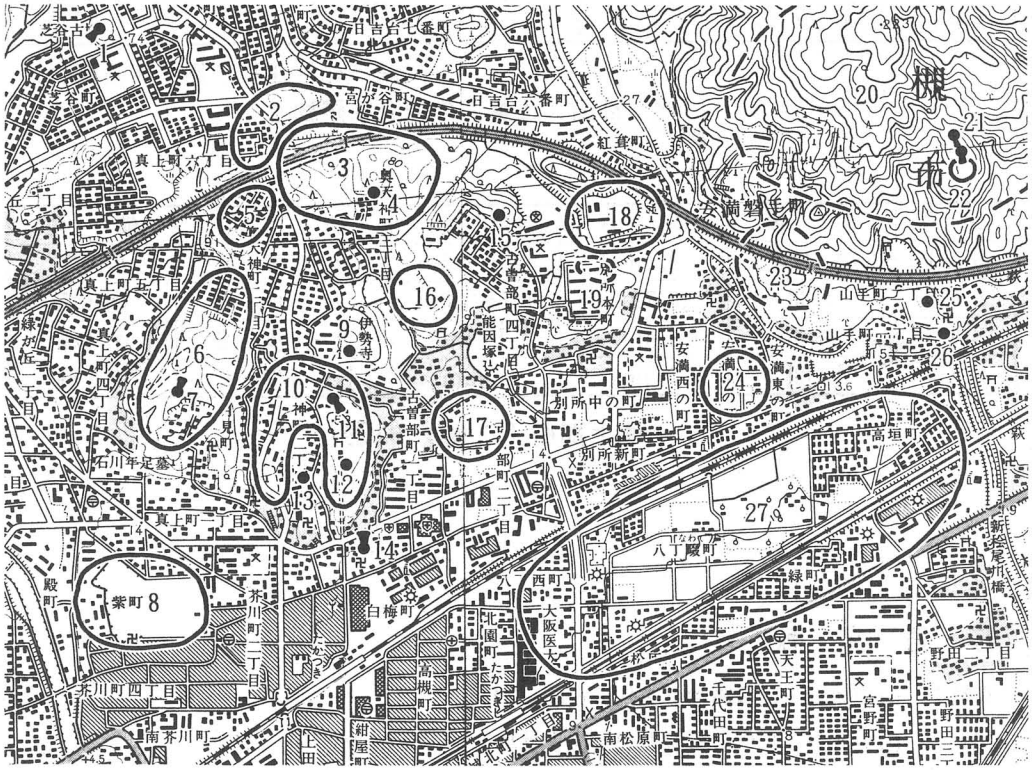


図１　古曽部遺跡とその周辺　　高槻・淀（1:25000）

1. 芝谷古墳　2. 芝谷遺跡　3. 古曽部遺跡　4. 古曽部古墳　5. 奥天神遺跡
6. 慈願寺山遺跡　7. 慈願寺山古墳　8. 芥川遺跡　9. 伊勢寺古墳　10. 天神山遺跡
11. 中将塚古墳　12. 宿弥塚古墳　13. 天神山銅鐸出土地　14. 昼神車塚古墳　15. 羅王山古墳
16. 宮山遺物散布地　17. 古曽部南遺跡　18. 紅茸山遺跡　19. 奥坂古墳群　20. 安満山古墳群
21. 萩之庄古墳　22. 萩之庄遺跡　23. 磐手杜古墳群　24. 安満北遺跡　25. 法照寺古墳
26. 法照寺瓦窯跡　27. 安満遺跡

いに近接する位置にあることから、密接な関係をもつものと考えられてきた。このようななか、1991（平成３）年から実施した古曽部遺跡の調査により丘陵上の集落についての新たな資料を得ることができた。ここでは三集落の関係について述べてみたい。

奥天神遺跡（奥天神町２丁目）は標高90m前後の尾根上にひろがる。1984（昭和59）年に実施された調査では、南北２か所の尾根で竪穴住居跡10棟、土坑墓１基を検出している。住居跡は円形と方形が混在する。

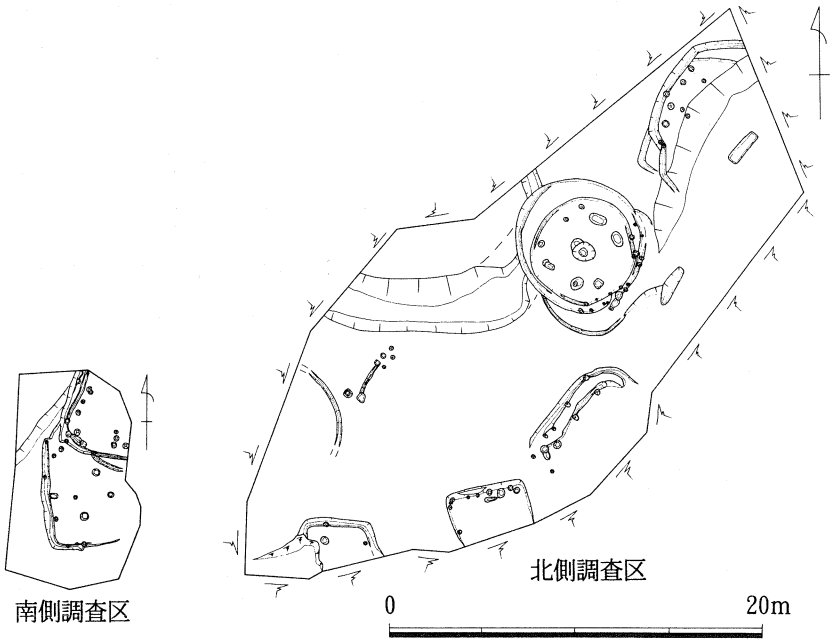


図２　奥天神遺跡

芝谷遺跡（真上町６丁目）は標高100mと丘陵主尾根の最高地点を占め、ここから南側の尾根をたどると奥天神、東側の尾根をたどると古曽部の集落にいたる。調査は1971（昭和41）年におこなわれ、竪穴住居跡33棟・土坑７基を検出している。竪穴住居は円形・隅丸方形・方形がある。まず最初に円形住居が尾根上に出現し、斜面をテラス状に造成しながら隅丸方形そして方形住居がたてられる。斜面に築かれた住居は立替えのたびに下方へ移動している。集落の北から西側にかけては急峻な崖となり、西側では焼土や土器が検出されている。また、北東側につづく尾根上にも住居群が存在するようである。

古曽部遺跡（古曽部町５丁目）は1953（昭和28）年に小規模な調査が実施され、２棟の竪穴住居跡や鉄鏃・鉄斧などが発見されている。この出土遺物は古曽部Ａ地点・Ｂ地点として報告され、一部の土器は『弥生式土器集成』にも採用されている。

図3　芝谷遺跡

1991（平成3）年より実施した調査では、急峻な斜面に掘削された大規模な環濠とともに39棟の竪穴住居跡、4基の木棺墓を検出している。ここでは数棟から十数棟でまとまった住居群が環濠の内外で6か所みつかっている。環濠外に位置する住居群は例えばⅠ区のように尾根を溝で断ち切り居住域を区画するなど、それぞれが独立した状態で営まれていた。

以上が3遺跡の概要であるが、ここでは古曽部遺跡検出の環濠に注目したい。環濠は、当初Ⅱ区住居群を囲むものとみられていたが、その後の調査により約200m西側に位置するⅣ区でもこれと同一と考えられる環濠を発見している。つまり、Ⅱ区を北へ延びる環濠が尾根に沿って北西へと続いたのち、南側へ屈曲してⅣ区へ至り、古曽部遺跡の範囲が従来知られているよりも大きく西へ拡がることになる。逆にいえば、古曽部の集落範囲は尾根続きにある奥天神、芝谷の集落と完全に接してしまうことになる。さらに、芝谷遺跡西側の崖は、古曽部遺跡での環濠検出状況からみるかぎり、谷側（西側）の肩が崩落した環濠とみることも可能と考えている。この場合、環濠は芝谷をも包含しつつ広範囲を巡っていたことになり、古曽部遺跡と芝谷遺跡は同一の集落として展開していたことは容易に推定できる。同様に奥天神遺跡において検出した住居群と古曽部Ⅳ区は一連の尾根上に位置することから、Ⅳ区検出の環濠は奥天神遺跡の東側よりも南側を巡るほうが地形的にみても無理がない。この場合、奥天神遺跡と芝谷遺跡の間には細い尾根と深い谷が存在することから、あるいは環濠が部分的に途切れていたかもしれない。いずれにせよ、大規模な環濠に囲まれた3遺跡は、一体となって丘陵上に展開していたといえる。これまで別個の遺跡としてきた古曽部遺跡、芝谷遺跡、奥天神遺跡は、本来はひとつの集落としてあることから、「古曽部・芝谷遺跡」と呼称するほうが遺跡の実態に則しているといえよう。

さて、古曽部・芝谷遺跡は東西約600m、南北約500mの範囲に展開する高地性集落であるが、急峻な斜面を持つ丘陵上に位置しているために、居住適地という点ではかなりの制約をうけている。現在判明している住居群は9グループ84棟であるが、未調

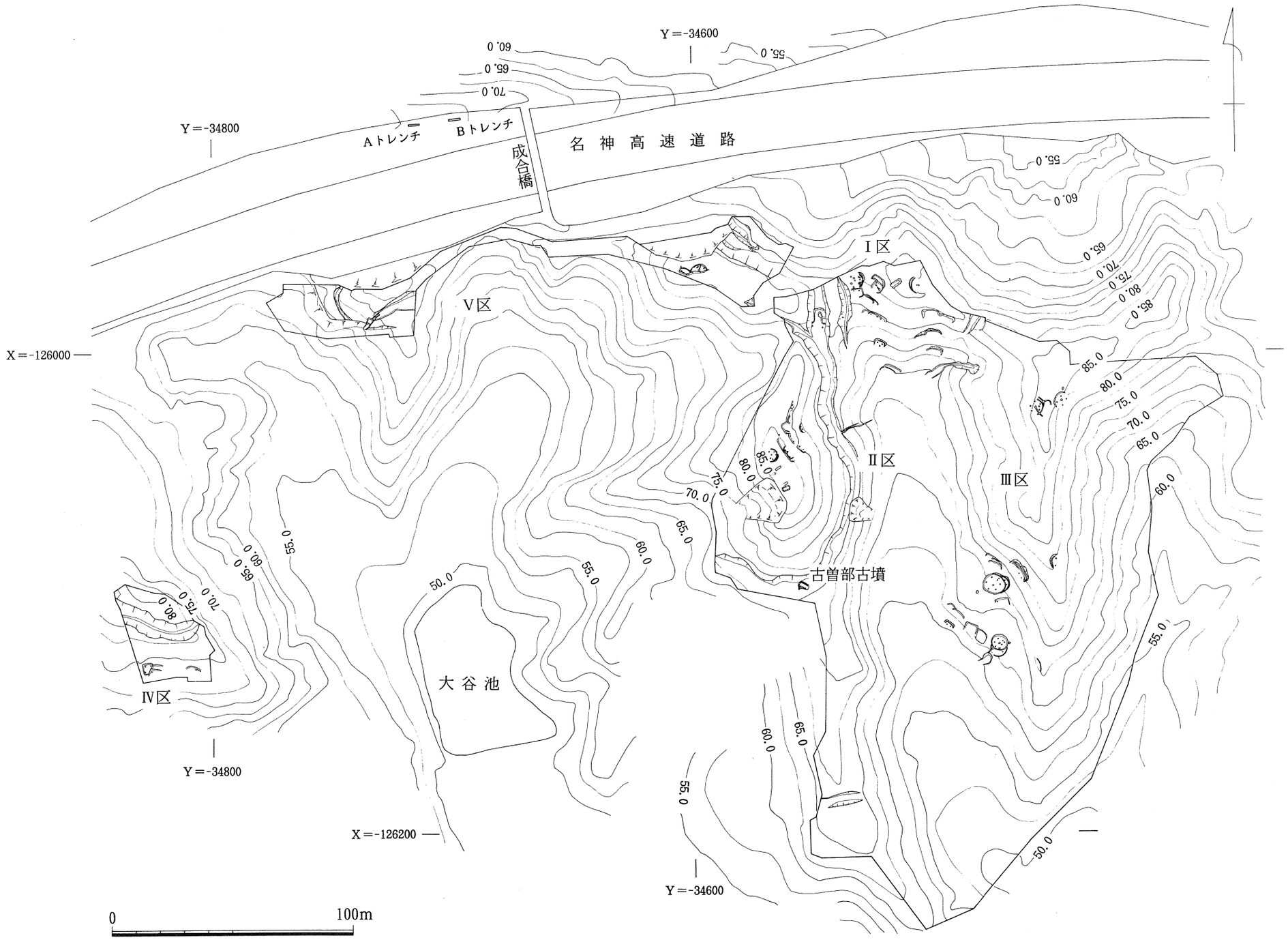

Y＝-34600
Y＝-34800
Aトレンチ
Bトレンチ
成合橋
名神高速道路
I区
II区
III区
IV区
V区
古墳部古墳
大谷池
X＝-126000
X＝-126200
0
100m

図4．古墳部遺跡全体図

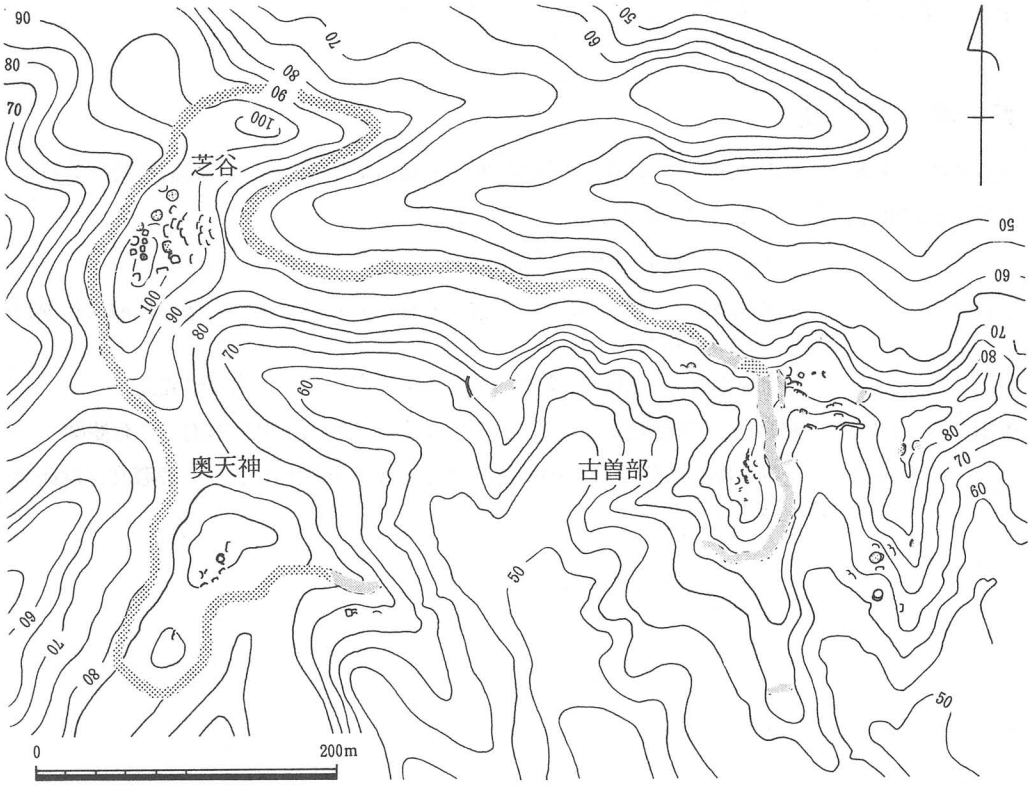


図5　環濠想定図

査域や旧地形を復元した場合、さらに数か所程度の居住域が想定可能である。これを包み込むように巡らされた、総延長が1000mを越えるであろう大規模な環濠は、直登不能な急斜面にも掘削されている。さらには埋没後すぐに再掘削する維持活動からすれば、城塞的景観をも呈すこの集落の切迫した状況を垣間見ることができる。

古曽部・芝谷遺跡の居住区、環濠の位置関係をみると、南側につづく谷を意識していることがわかる。この谷を1.5kmほど下り、標高10m前後の平野に至ると正面には安満遺跡がひろがる。このように近接した位置関係から、両者の関連性を指摘することができよう。同じようなことは出土遺物の面からもいえる。安満遺跡は石斧や石包丁などの磨製石器を生産・供給する集落であることが知られ、ここでは原材料である近江産の粘板岩（高島石）などが出土している。古曽部・芝谷遺跡においても高島石の磨製石器や原石・未製品が出土し、さらには近江産の土器を検出するなど、安満と同様に近江地域との関係がうかがえる。このようなことから、安満の人々が古曽部・芝谷へ移り住んだと考えることは容易であろう。しかしながら、丘陵上に集落が出現する弥生後期初頭ごろは、平野部での集落の動向が判然としない時期となっている。これは逆に安満だけでなく、他の集落も丘陵上で展界していたため、限られた範囲に

集落が集中するという事態も想定できるのではないだろうか。

参　考　文　献

大船孝弘　1988　「奥天神遺跡」『昭和59・60年度　高槻市文化財年報』　高槻市教育委員会

高槻市史編纂委員会　1973　『高槻市史』6　考古編

1977　『高槻市史』1　本編1

宮崎康雄　1992　「古曽部遺跡」『弥生時代の石器－その始まりと終わり』5　埋蔵文化財研究会　関西世話人会

免山　篤　1960　「古曾部の弥生式遺跡の遺物」『古代学研究』26　古代学研究会

森田克行　1989　「大阪府　安満遺跡」『探訪　弥生の遺跡　畿内　東日本編』　有斐閣

1992　「芝谷遺跡」『弥生時代の石器－その始まりと終わり』5　埋蔵文化財研究会　関西世話人会

芥川城跡出土資料の検討

橋本久和

1．はじめに

80年代以降、中近世の遺構・遺物をめぐる調査・研究は日進月歩をたどり、今や日本考古学における重要な一分野を占めるようになった。とくに、堺環濠都市遺跡と大坂城跡の調査では質・量とも圧倒的な資料を提供し、両遺跡を抜きにして中世末から近世にかけての論議を展開することは不可能である。また、両遺跡と京都や博多で検出された遺構から中近世都市論へと論議が展開しようとしている昨今の状況から、近い将来考古資料からみた近世成立期の社会が復元されようとしている。そこでは富裕な都市商人層の存在や流通経済の活発な展開が指摘され、従来の動乱の世の戦国時代という側面が薄れつつある。このため、現状の近世社会成立をめぐる論議は華やかな都市生活を謳歌する人々を対象としている。しかし、都市は都市のみでは自立したのであろうか。都市を支えた農村部の在り方、とくに南北朝以降の武士団を中心とした地域社会の変容を語る研究も重要な課題であろう。

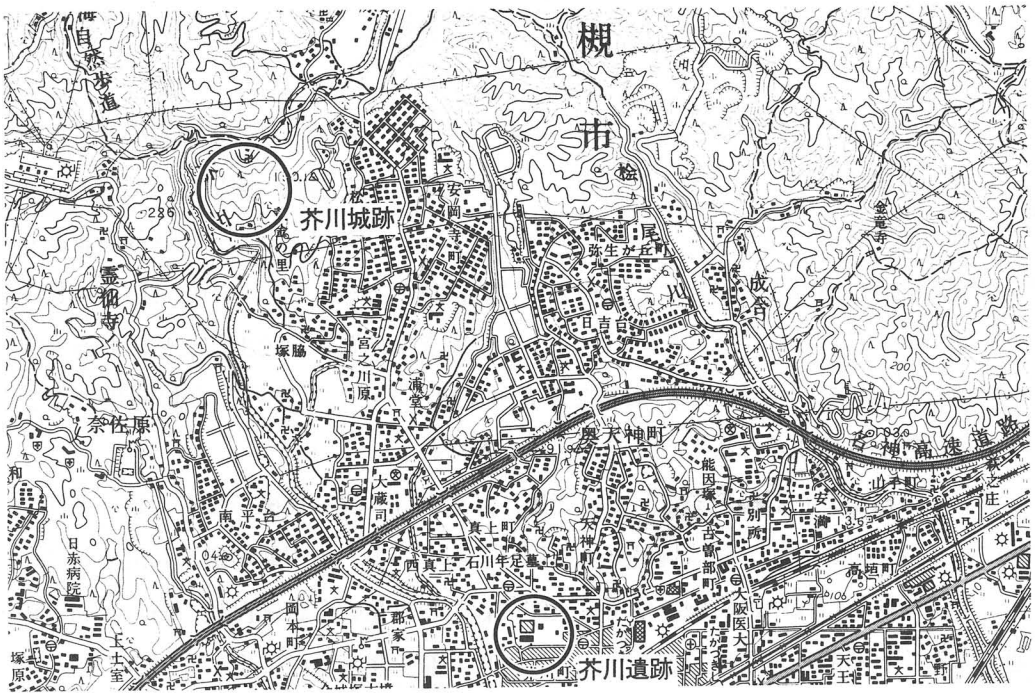


図1　芥川城跡・芥川遺跡位置図（1:25000）

このような視点にたって、大阪北部をみると池田市池田城など戦国時代の群雄割拠の状況を今に伝える資料の多いことに気づく。高槻市では高槻城跡の調査において近世高槻城跡に先立つ遺構や陶磁器類が出土しているのをはじめ、一向宗の寺内町富田として栄えた富田遺跡では往時をしのばせる資料がしばしば出土している。また、富田には天文法華の乱で焼かれた教行寺もあり焼土が確認されている。ただし、これらは組織的な発掘調査によるものは少なく、多くは他の時代の調査に随伴したものや採集されたものである。

ここで取り上げた芥川城跡に関する資料も少量であるが、少ない資料をつなぎあわせながら課題にせまりたい。後述するように芥川城跡の位置については二説存在するが、ここでは摂津峡下の口の三好山説をとる。もう一方の西国街道に沿う芥川説付近から出土したものについては芥川遺跡に含めるものとする（図１）。

２．出土資料の検討

（１） 芥川遺跡

図２・３にまとめたものは日本たばこ産業敷地西隣において1976年に調査した地区から出土した資料である。明確な遺構から出土したものは少ないため一括して概観するが、資料は14世紀代のものと15世紀後半から16世紀代に属すものに大別することができる。

まず14世紀代の資料では、１～３はいわゆる「ヘソ」皿とされる土師器小皿である。いずれも口径約７センチ、高さ約２センチで、底部中央を内側に突出させている。４は小皿、５・６は口径約10センチの杯である。７・８は底部が丸く、口縁部の屈曲する椀である。色調は３を除き淡黄灰色または黄白色である。３は淡褐色で胎土・色調を異にしている。このような土師器は４～５を除き京都系の白色土器と呼ばれるものを模倣したもので、大阪北部の編年で筆者がⅣ期とするものである（橋本1992年）。６は口縁部が外反するためもう一時期後出とみられる。

９・10は楠葉型瓦器椀である。９は明確な高台の付される最後の段階でⅢ－３期、10には高台が付されず、瓦器椀最終末のⅣ－２期である。中国製陶磁器も出土している。33は玉縁状口縁の白磁碗で横田賢次郎・森田勉分類の白磁碗Ⅳ類である。34は鎬蓮弁のみられる龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５－ｂ、11も龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５－ｂであるが粉青色を呈し小ぶりのタイプである。12も龍泉窯系青磁で内面に双魚とみられる貼付文がわずかにみられ、色調は緑で、杯Ⅲ－４－ｂである（横田・森田1978年）。13は

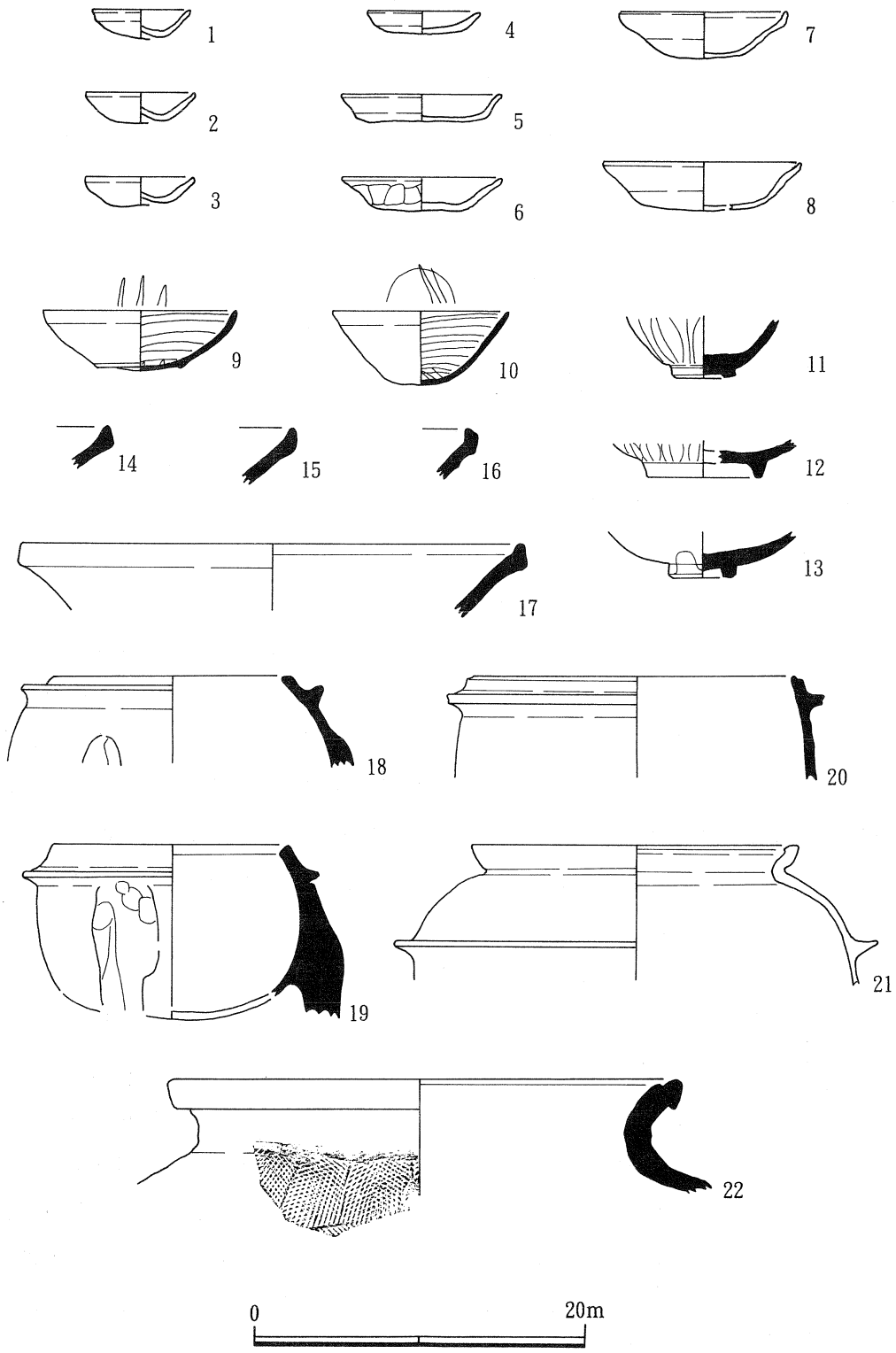


図2　芥川遺跡出土資料

高台部露胎の白磁皿で、釉は不透明で厚く、胎土は軟質で粗い。小野政敏分類の白磁皿Ｂ群に含まれる（小野1981年）。14～17は東播磨系の須恵器鉢で、いずれも軟質・灰白色で口縁部が肥厚し16・17では縁帯状となっている。22も東播磨系の須恵器甕で、口縁部は縁帯状となり肩部に矢羽根状の叩きをのこしている。18～20は瓦質の土釜で、脚の付くものと付かないものがある。これらは９・10の瓦器椀より古い時期に出現しているものもあるが、１～８の土師器皿・杯とも同時期に使用され、下限を同じくするものである。また、東播磨系須恵器の終末を15世紀にまで下げる森田稔の考え（森田1993年）もあるが、筆者は否定的立場を明らかにしている。このため、図２にまとめた資料は14世紀前半から中頃と位置付けて大過ないものと考える。

15世紀以降の資料は図３を中心にまとめたが、図２の21は「く」の字形に屈曲する口縁部と体部上位の鍔が特徴的な土師質土釜で、精良な胎土で器壁は薄く、色調は淡黄褐色である。菅原正明の大和Ⅰ２型（菅原1983年）とするもので、大永２（1523）年銘をもつ奈良市古市城跡出土資料に後出し、川口宏海のⅢ－１型式（川口1990年）に相当し大和からの搬入品とみられる。

23・24は信楽焼甕である。23は口縁部の小破片であるが常滑焼の影響をうけた「N」字状口縁を呈し、木戸雅寿はＢ２類・15世紀前半としている。24は先端をつまみ出し独自性がみられるが同時期のものとみられる（木戸1989年）。25～29は備前焼擂鉢である。25を除き８本単位とみられる摺目がみられ、内面は相当磨耗し、長期間にわたって使用されたことがわかる。口縁が拡張気味で28のように端部内面に面をもつものもあるが、胡耶山下窯址や不老山東口窯址出土資料に類似しⅥＢ期に位置づけられる（伊藤1985年）。

中国製の青磁と染付もある。青磁には30・31のように口縁部が外反し、高台部外面と内底部の釉を円形に掻きとる無文碗と40の線描蓮弁文碗がある。小野の15・16世紀の時期区分では、前者は15世紀前半から後半にかけてのⅠ期、後者は15世紀後半から16世紀前半にかけてのⅡ期に位置づけられる。染付は35の体部外面に唐草文様のみられる破片と高台近くに唐草文のみられる底部破片（36）がある。これらは文様からみて同一個体とみられるが、端反口縁を呈す器形から小野のⅠ期に位置づけられる。また大橋康二はこれをⅠ類とし1420年頃から15世紀末の年代をかんがえている（大橋1981年）。37は粗い胎土の染付碗底部である。32・39は小野のⅠ期・Ⅱ期にしばしばみられる瀬戸・美濃の灰釉平椀と鉢である。

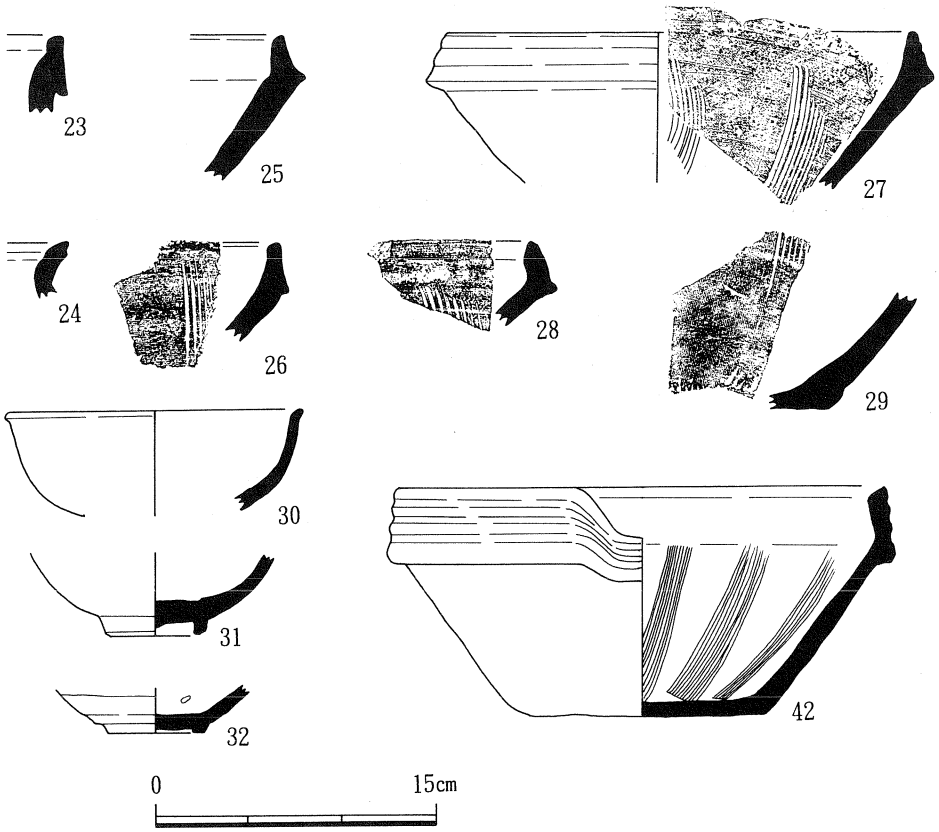


図3　芥川遺跡・芥川城跡出土資料

（2）　芥川城跡

城郭研究家による踏査は実施されているが、発掘調査など考古学的調査はこれまで実施されたことがない。このため、考古資料としては42の備前焼擂鉢が唯一のものである。この資料は市民が芥川城跡見学会に際して、二ノ丸推定地付近で採集したものである。復元口径25センチ、器高12センチを測る。幅広く拡張した口縁部外面には3状の凹線がめぐり、10本単位の条線による摺目がみられる。条線がまじわることはなくⅤ期の典型的な資料である。

（3）　塚脇古墳群

芥川城跡の立地する三好山東側にある帯仕山の中腹から山麓にかけて塚脇古墳群が分布しているが、1963年に調査された12号墳石室から染付皿（40）と小杯（41）が出土している（西谷1965年）。皿は外面に牡丹唐草文を、内底面に十字花文を描くもので小野のⅡ期に普遍的にみられるもので、小杯も同時期のものであろう。また、この古墳では大和産とみられる瓦質擂鉢も報告されている。奈良市古市城跡や多門城跡か

ら出土したものに類似する資料で立石堅志は奈良Ⅳ－B期・16世紀中頃から後半と考えている（立石1989年）。

3．まとめと今後の課題

芥川城は“三好山”に築かれた山城と西国街道沿いの平城のあることは従来から城郭研究者などから指摘されてきた。平城は正平年間（1346～69）に芥川三河守によって築かれたものとされ、今回の資料検討によって南北朝期から戦国時代にかけての土器・陶磁器類の出土が明らかになった。また、戦国時代の資料は量的には少ないものの、各地域の戦国時代遺跡から出土しているものと同じ内容をもち、比較的報告例の少ない15世紀代の信楽焼や染付碗もある。このため戦国時代にいたるまで、西国街道沿いになんらかの施設が連綿として営まれたことがわかる。1976年に調査された芥川遺跡西部では柱穴や井戸が検出されているが建物群や屋敷跡としてまとめることはできず、芥川城跡にかんする遺構は検出されなかったとされているが、14世紀代の出土資料から芥川宿を根拠にした芥川氏の屋敷＝平城を芥川遺跡西部の殿町周辺に比定することが可能であろう。しかし、1989年からの日本たばこ産業敷地内での調査においても中近世の遺構・遺物はほとんど知られていない。とくに、西国街道が芥川宿入り口付近で屈折することがしばしば指摘され、その原因が城にあるとされるがはなはだ疑問と言わざるをえない。このため“戦国時代の城跡”には消極的にならざるを得ないが、なんらかの施設の存在が指摘できる。それが、西国街道を利用した交通運輸にたずさわる施設か軍事的なものかを指摘することは現段階では困難である。

このように、戦国時代の芥川城については、現存する郭や土塁などから三好山に比定するのが妥当とかんがえられ、唯一採集された備前焼擂鉢から16世紀代を中心とするものと推定できる。現在、三好山から帯仕山山麓にかけて住宅が密集し、著しく旧状を変形しているが（図４）、塚脇古墳群出土の中国製染付などは芥川城遺跡に拠った武将の家臣団の居住区域が存在したことを物語っているようである。

織田信長が永禄11（1568）年に摂津に侵攻するまで、芥川城には実質的に室町幕府を掌握していた細川晴元や三好長慶が居城し「芥川政権」の提唱もある。その間の歴史的推移については『高槻市史』第１巻の「戦国動乱と高槻」に三浦圭一氏が詳しく論述され、その位置についても三好山であることを明言されている。このような先駆的指摘に対し、考古学的手法による調査・研究は著しく遅れているのが現状であるが、京阪神に残る戦国期の城跡として旧状を良くとどめているため、保存・活用につとめることが今後の課題である。

参 考 文 献

橋本　久和　1992年「古代後期・中世の土器」『中世土器研究序論』

横田賢次郎・森田　　勉　1978年「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』

小野　政敏　1981年「山梨県八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第１号

森田　　稔　1993年「須恵器の終末とその行方」『季刊考古学』第42号

菅原　正明　1983年「幾内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』

川口　宏海　1990年「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ

木戸　雅寿　1989年「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ

伊藤　　晃　1985年「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』

小野　正敏　1985年「出土陶磁よりみた15、16世紀における画期の素描」『ＭＵＳＥＵＭ』No.416

大橋　康二　1981年「15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案（１）」『白水』No. 8

西谷　　正　1965年『塚脇古墳群』　高槻市教育委員会

立石　堅志　1989年「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ

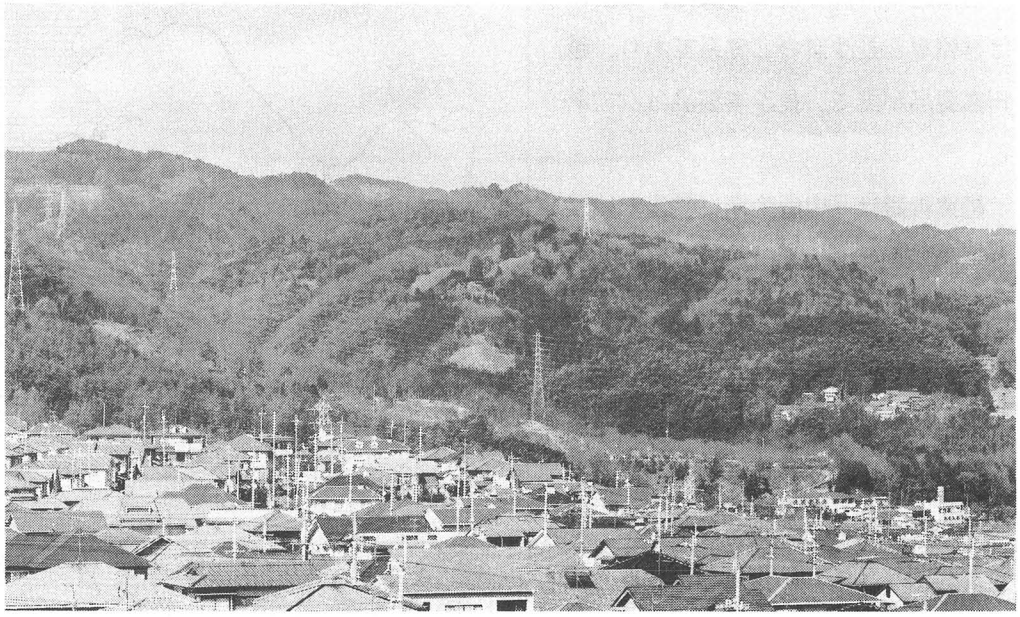


図４　芥川城跡遠景（南平台５丁目から）

明州港の歴代青磁輸出試論

林　士民著
橋本久和訳

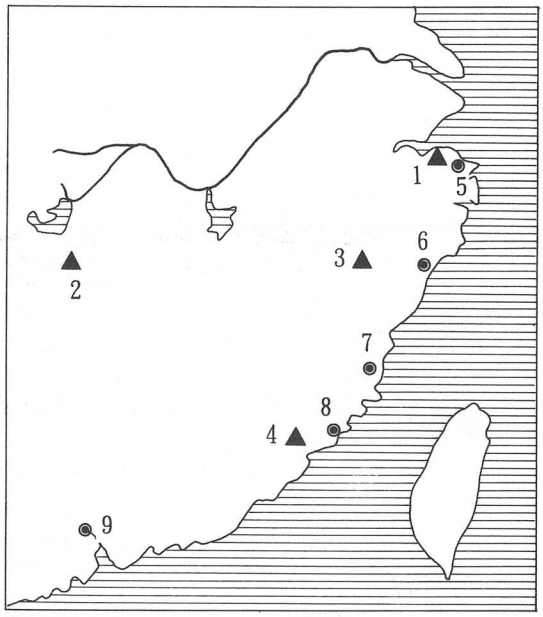
1．はじめに

対外貿易は国家と国家が商品の売買活動を進めることである。この種の国内市場を越える商品交易流通の形式は、人類社会の生産力発展と社会的分業の必然的な結果で、各国の経済交流と和平にとって重要である。明州（寧波）港から輸出された青磁は「磁器の道」を通り五大陸に渡り、我が国の対外友好貿易を促進し、特に唐宋以来、この種の貿易は日増しに頻繁となった。それらは世界各地に存在し、この側面から明州の対外貿易の盛況を反映している。磁器の輸出量が日ましに増えたため、明州の製磁手工業は速やかに発展し、唐代に始まった新興の商品としての磁器は、国際市場に並べられ遠く世界各地に運ばれた（図１）。

2．唐　代

明州港の唐代の輸出青磁は、主要には越州窯と長沙窯の二窯系であり、越州窯製品が主で、長沙窯製品は次である。

越窯青磁は「中唐晩期に輸出が始まり、晩唐に大量に輸出された」。これは、唐代青磁窯の数から説明できる。不完全な統計であるが、唐・五代・北宋の青磁窯は５、60ケ所あり、その中で初唐・中唐期は指折り数えることができ、これに比べ晩唐期の窯は多い。世界各国（各地）の古文化遺跡から出土した越窯青磁の器物をみると、日本出土の直口で体部が丸く、高台が付き、



1 越窯　2 長沙窯　3 龍泉窯　4 同安窯
5 寧波（明州）　6 温州　7 福州　8 泉州　9 広州

図１　青磁生産窯と貿易都市

内面に重ね焼痕のある碗がもっとも早く中唐晩期に属しているが、数は極めて少ない。碗・盒・執壺などの組成は晩唐期の大量生産品である。次ぎに、エジプト、イランなどの国から出土した直口で体部が真っすぐ、蛇の目底の碗は晩唐時代の製品に属している。

世界各地の考古調査で出土する器物は越窯系統の青磁が下記の国家と地区に輸出されたことを表している（図２）。

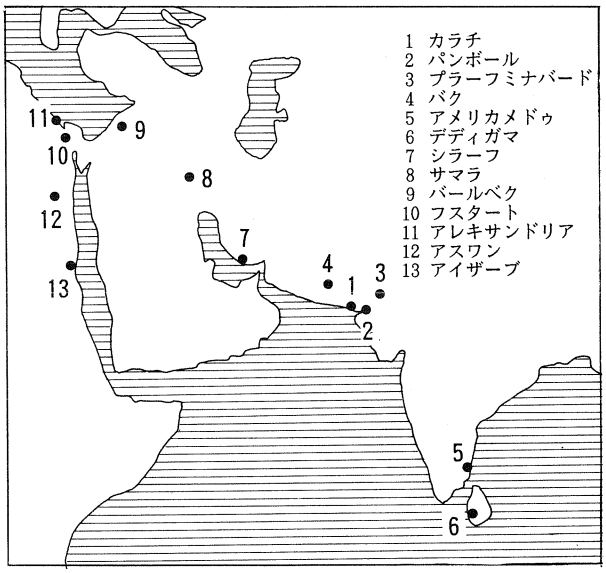


図２　青磁出土都市

朝鮮では、「越窯青磁灯碗、四耳壺、六耳壺・・・が出土している」。近年発掘された古新羅時代の第98号墓から越窯の青磁小壺が出土している。

日本では、越窯青磁を運んだ商船は唐の会昌２（842）年が最も早く、その後、年をおって増加した。大中３（849）年に至り、明州の張友（支）信など53人が日本貿易に赴き、そのなかで越窯青磁は主な商品のひとつであった。

今の福岡市平和台に設置された鴻臚館は当時日本の使節が出航し、中国商人が上陸し、また太宰府官吏たちが居住し交易する場所でもあった。この古文化遺跡で多くの越窯青磁が出土している。日本の学者の研究では、近江を東限とし、越窯青磁出土遺跡は40ケ所ある。そのなかの22ケ所は九州である。仁和寺円堂出土の越窯青磁盒子は904年円堂建造時に土壇下に埋められたもので、晩唐の元祐元年にあたる。

筑紫野市大門から執壺が出土し、京都市四条御前通西北角からも越窯の碗などが出土している。これらの出土磁器のなかでは、越窯青磁の数量に比較して三彩や白磁が多い。

インドでは東南岸のアリカメドゥから唐末の越窯製品が出土し、７世紀から11世紀のインド商業の中心プラーフミナバード発見の越窯碗は晩唐である。

パキスタンでは、カラチ東郊のバーンボールから晩唐越窯の水注が出土している。日本の岡崎先生もここで越窯磁片を採集している。

イランでは、ペルシャ湾の古代に繁栄した港のひとつシラーフから越窯青磁が大量に発見され注目されている。沙布尔・米納布・頼依・尼夏普尔などからも唐代越窯青磁が出土している。

マレーシアではサラワク河三角洲出土中国陶磁のなかに越窯青磁がある。

イラクでは、サマラ発見の越窯唐代磁器以外に、在斯薩などでいずれも唐代越窯器物が発見されている。

エジプトでは、越窯青磁の出土が最も多い。フスタート遺跡1ケ所で1964・1965年出土の中国陶磁器は10,106片で、そのなかに中唐越窯は673片をしめる。典型的なものは蛇の目高台碗で、周囲に重ね焼きの痕跡がある。

越窯青磁は対外貿易を通じて、世界各国（各地）の古文化遺跡に大量の遺物が保存されている。主要な出土遺物は各式の碗が主で、壺・盤・小皿・罐・盒・水注・杯・托盤・睡壺などの生活用具がこれに次ぐ。唐代早期の四耳壺・羊形灯盞なども出土している。

前述の青磁は造形・釉はもちろん、大部分は寧波市波止場遺跡付近出土の貿易用器物と一致している。寧波波止場遺跡出土の700点余りの製品のなかで、直口・体部が真っすぐ・蛇の目底、あるいは直口・体部の丸い・小高台（内面に松子状の重ね焼き痕あり）などの碗と各式の壺・盤などの器物組成は外国出土のものに似ている。考古工作者はこれらの出土遺物を越窯系の各窯と対照・調査している。上虞窯の生産品の質量は慈渓窯に遠く及ばず、その器物形状は前述のものとは合わない。鎮海窯の小洞岙窯跡の碗類は良くにている。慈渓窯の上林湖窯場の杜湖下窯舎窯群、白洋湖石馬弄窯群（中唐）の碗・執壺などは良く似ている。とくに、上林湖馬渓灘・施家坪・下灘頭・荷花心などの窯群で生産された執壺・碗・海掌杯、各類の盒・盤・罐・鉢・托具などの組成の青磁器物はその造形・紋飾いずれも基本的に同じである。また、イラク出土の小円凹底と撥口碗、イラン・エジプト出土の直口碗はいずれも慈渓上林湖窯群のなかの晩唐期窯跡の生産器物と完全に一致する。日本古陶磁学者は「日本へ輸入された陶磁器で、越州窯陶磁器の器形のなかで碗が圧倒的多数を占め、その次ぎに盤（小皿）・壺・水注・盒子・睡壺と托盤の可能性がある。これらの多数は浙江省余姚（慈渓）上林湖窯の製品である」と指摘する。これは、前述の古窯製品が国内以外に国外市場の需要に応えたことを説明している。

寧波市和義路唐代波止場遺跡出土の長沙窯器物は、地層の堆積や出土遺物の造形、釉色、彩絵などと湖南長沙窯窯址出土遺物を対照し考察を加えると、多くの生産品は

晩唐時期、すなわち大中前後に属す。「大中２年」銘文の雲鶴紋碗と共存の器物には、その中に多くの長沙窯製品が含まれ、その時代と長沙窯試掘報告資料とは合致する。イラクのサマラ（この城は唐の開成元年に建てられ、中和３年に廃された）などの出土遺物は、長沙窯磁器が開成年間（836～840年）に遠くアラビア半島まで運ばれたことを示している。このことから、この窯の製品が輸出された時代は中唐晩期の可能性があり、大量輸出は晩唐時期にあるといえる。

長沙窯磁器は釉下彩絵で有名になった。「唐三彩の技法」を使い、「彩絵磁器の新局面」をつくっただけでなく、市場を開拓するために宣伝を積極的にした。とくに、壺類は、外面の「天下第一」、「天下有名」、「行満天下」などこれら広告性のある芸術装飾と「五文」、「計五文」という明確な正価などの題銘・題詞および単色の青釉（白釉）の下に奇麗に現れた褐色・緑など多種の器物は人々に喜んで受け入れられ、国際的な魅力があった。ただし、民窯であり、統治者が外国への贈り物として作ったものに限られ、当然有名な越窯製品に比べその範囲は限られる。

長沙窯製品の伝播経路からみて、当時我が国の青磁発展水準の最高である越窯産地を通過して、東アジア・南アジア・ペルシャ湾とアラビアという千里万里の地へ輸出された。

長沙窯の器物で朝鮮西海岸の龍梅島から「鄭家小口天下第一」と「卞家小口天下有名」という題銘のある褐斑貼花人物壺が出土している。日本太宰府付近の筑紫野市大門出土の水注は頚部と注口の残欠で胴部は瓜状に作られ、３ケ所に楕円形の褐色釉が施される。パキスタンのバーンボーレ、バクから多くの釉下彩絵磁器が出土し、なかでも青黄釉褐緑彩絵碗にもっとも特徴がある。イランのシラーフ、比比加頓、庫吉斯坦、斯沙などの港町と内陸の沙布尓から三耳水注・双耳壺・三耳貼花水注と彩絵盤・鉢などが出土している。イラクのサマラ遺跡からは褐緑釉下彩磁の破片が出土している。このほか、フィリピン、タイ、スリランカなどいずれも褐斑貼花壺が出土している。

前述の地点出土の長沙窯磁器は、寧波市唐代遺跡波止場出土の多くの長沙窯釉下彩絵の執壺・罐および褐色貼花の壺などの器物と一致する。

このようなことから、越窯と長沙窯は唐代明州の貿易陶磁のなかで主要な窯系で、我が国陶磁器貿易史上第一次高潮期に出現した重要な窯といえる。当然、数量の上から越窯の製品の多いことは疑いない。前述の長沙窯の出土地点のなかで、往々にして越窯の器物も出土する。また両者が混在する地方もある。例えば、日本の久留米市山

本西谷の火葬墓では長沙窯の壺は蔵骨器とされ、越窯青磁碗はその上の蓋にされていた。平安京の京都四条御前西北角では、越窯青磁碗と長沙窯褐釉貼花水注はいっしょに出土した。この2窯の組み合わせ状況はイラン・パキスタン・イラクなどで発見されている。日本の岡崎先生の言うようにまさに「明州商人は越州窯青磁だけでなく、長沙窯青磁ももってきた」のである。

3．五代・北宋

明州磁器の貿易は唐代の基礎の上に、五代・北宋期にさらに発展した。同時に越窯系統の窯場にも新たな発展がある。唐代に比べ、慈渓上林湖窯と上虞窯を基礎にして窯の数は増大し、生産量も大幅に上昇した。ふたつの窯場以外に鄞県東銭湖にも輸出用の窯場が設置された。この新たに突然現れた東銭湖窯場の製品は上虞窯の官窯を質量とも越えている。この越州1ケ所、明州2ケ所の3大窯場の製品は朝廷に献上するだけでなく、国内に売られ、さらに遠く海を渡り世界各地に運ばれた。

ここに世界各地から出土した五代から北宋にかけての越窯青磁の主なものがある。

西域と南海地区

インドでは東南海岸のアリカメドゥから五代の越窯青磁が出土している。スリランカのデディガマ寺院の塔からも10世紀前後の越磁が出土している。パキスタンのカラチ東郊のバーンボーレ発見の越窯青磁は宋代の劃花文青磁である。マレーシアのサラワク地区ではこの10年来中国の越窯青磁が出土している。ペルシャ湾の港シラーフでは大量の越窯青磁が出土している。イラクのサマラから出土した北宋前期の越窯青磁の文様は慈渓上林湖窯の北宋器物と一致する。エジプトのフスタート遺跡出土資料の多くは外国の学者が唐の越窯青磁と鑑定しているが、部分的には五代の器物もある。例えば、碗の内面下部および底部に蓮弁を刻し、高台付きの浅い碗と細い彫刻で刀法の流麗な双鳳盤は鄞県窯と慈渓上林湖窯の五代・北宋窯で常にみられる。

日本と朝鮮地区

日本ではとくに晩唐期の越窯青磁の輸入量が多く、このため古文化遺跡から出土するものも豊富である。五代の時期、寧波から日本へ渡った商人は陶磁器貿易で重要な役割をはたした。これらの商人は絹・調味品と同時に陶磁器を携えて博多に至ったが、その主なものは越窯陶磁器である。当時、呉越（明州）から雇われた商人には、蔣承勛・李盈張・蔣袞・兪仁秀・張文遇・盛徳言がいる。これら呉越商人を通じて、平安京の朝廷と呉越王銭元瓘・銭佐・銭弘俶などは書を交わし、従来は密接であった。貿

易は慈渓上林湖と鄞県東銭湖の二大窯場の製品が主である。日本の鴻臚館跡から大量の越窯青磁が出土し、そのなかに上林湖窯の劃花草文碗で五代・北宋に属す器物がある。久留米市山本・薬師寺からは呉越開玉6（973）年の越窯青磁破片が出土している。

朝鮮では新羅時代晩期、甄萱は使節を呉越に派遣した。呉越国はその後百済にも国書を送った。高麗もまた呉越と往来があり、9世紀から10世紀にかけて浙江方面と密接な関係を開始した。貿易上、陶磁器は商品のひとつして運ばれた。10世紀前半、越窯系の製磁技法は全羅南道泉津、全羅北道扶安などに伝わった。逐次、越窯青磁の輸入と代わっていった。

以上のように、五代・北宋期に明州から輸出された越窯青磁の数量は前代を超過した。晩唐以降継続している世界の港湾都市遺跡では、一定数量の越窯青磁が出土している。これらの港と中国が往来し、陶磁器交易が重要な位置を占め、中国貿易陶磁器の第2次高潮期を証明している。

4．宋・元代

明州港は宋・元代にも依然青磁の輸出は多かったが、後の浙江に興った優秀な龍泉窯の製品が主である。

発表された考古資料からみて、広州・泉州と温州など古い港遺跡では、貿易されたと記載された龍泉窯青磁の多くが未発見である。寧波では1987年に、宋元市舶庫付近の東門口波止場遺跡から多くの宋・元代の龍泉窯青磁が出土している。運搬で壊れ、波止場に捨てられたものとみられる。数量は多く、品種も豊富である。この製品は胎土が細かく白い。釉は厚く、玉のように潤いがあり、粉青・翠青・梅子青などの色を呈す。

典型的に器物は、宋元時代では夾層碗・蓮弁盤・折縁盤・直口坏・敞口洗・葵口洗・鬲爐・魚耳瓶・貫耳瓶などがある。元代では蓮花碗・高台付き碗・翻口収腹碗・高足碗・敞口小底碗・“増添福禄”銘碗・菊弁洗・蔗段洗・双魚洗・雲草洗・蔓草敞花洗・花卉盤・菊弁盤・口縁の大きい仰蓮盤・大平底印花盤・堆花瓶・奁式爐・侈口盅・荷葉蓋罐・灯盞などがある。

東アフリカ・地中海

東アフリカではエジプトのフォスタート、この古い都市から出土した龍泉窯青磁は一回で964破片である。古エジプト（今のスーダン国境の海岸）のアイザーブ港の遺

跡では龍泉窯青磁が発見されている。ナイル川のアレキサンドリア港の列車駅付近で、1964年にポーランド調査隊が発掘した遺跡から南宋から元代にいたる中国龍泉窯青磁破片が出土した。アスワンでも南宋・元代のこの窯の器物が発見されている。ナイル川を逆上り、最後に到達するエチオピアでも宋・元代の龍泉窯破片が発見されている。タンザニアのキルワ島遺跡では10世紀の唐末から宋初の越州窯が出土している。ケニアの格帝城大清真寺とその遺跡から、南宋寧宗（1195～1225年）時代の「慶元通宝」と理宗（1225～1265年）時代の「紹定通宝」が大量の龍泉窯磁器と一緒に出土した。これは、東アフリカでは唐末・五代から宋初にかけては越窯青磁が、宋・元には龍泉窯青磁が輸出されたことを証明している。

レバノンのバールベクは中世イスラム時代、シリアの内地から海岸へ至る際必ず経由する地で、内外面蓮弁花文の宋代龍泉窯青磁鉢の破片が発見されている。イラクのサラマ遺跡から南宋代の龍泉窯鉢破片が出土している。

東　方

龍泉窯青磁は日本に少なからず輸出された。日本では早くから三百数十ケ所の經塚が発見され、常に中国陶磁器が発見されている。平安後期から鎌倉時代に至り、出土地点の多くは古くからの中日交易の根拠地九州の博多付近、交通の要である瀬戸内沿岸各地、幾内一帯と中心的区域の鎌倉などに集中する。“出土の青磁は浙江省の龍泉窯・・・外面に蓮弁文を刻む碗が突出する。”龍泉窯を代表する作品の青磁は各地出土の半数以上は粗製で暗い色彩である。鎌倉市大町出土の青磁大鉢・称名寺金沢貞顕墓出土の青磁鎬文壺は宋末元初の龍泉窯青磁の優等品である。

朝鮮出土の龍泉窯青磁は、一回としてはもっとも多く、1976年夏の朝鮮新安海底沈船からひきあげられたものは六千余点である。そのなかの龍泉窯青磁は約三千点余りである。多くは、元代の物で、南宋龍泉窯で生産された優質の碗・小皿・瓶・花瓶と香炉もある。釉色は粉青、梅子青と翠青などである。元代の器物の多くは底部が淡紅褐色で釉は厚く、深海青あるいは青色が多い。文様は碗・小皿類では外面は凸蓮弁で、花瓶の耳は魚・龍または双鳳、小皿の内底面には印花もある。このような組成の宋・元代の龍泉窯青磁は、近年フィリピン出土のものに類似する。さらに、斂口青磁小碗・小高台直口碗・蓮弁坏・五管瓶などの器物がある。これらから、宋元代、浙江龍泉窯製品は大量に輸出され、中国陶磁器輸出の第三次高潮期の重要な一窯系であった。

前述のように、龍泉窯青磁は世界の相当広範囲に、「陶磁の道」を通って広範に交易され、特に顕著な特徴がある。

第一は大多数の沿海港湾都市では唐宋から元にかけて、いずれも我が国の青磁が運ばれた。

第二は前述の龍泉窯青磁の出土した地点は、十中八九唐から継続し、五代・北宋の越窯青磁の輸出された国家（地区）で、宋・元代にもつづいて運ばれた。このため、このような遺跡からは越窯早晩期の器物と長沙窯磁器がかなり出土し、宋・元代の龍泉窯青磁も出土する。

このような多くの龍泉窯青磁はどこの港を通ってはこばれたか。

南に向かう泉州・福州と北に向かう明州（寧波）の３港の考古資料からみて、寧波を除いて、泉州・福州では大量の龍泉窯青磁が運ばれたという実物は未発見である。福州・泉州の貿易龍泉窯青磁と学者があげているものは、実際は福建の同安窯青磁で本当に浙江で生産された龍泉窯窯系の青磁ではない。

温州は福州と明州（寧波）の中間に位置し、無論、南洋・日本・朝鮮からも船が来るが、その航路は他の沿海港よりも長く、その他の地区とは交通条件に格差があり、その経済範囲は寧波にはおよばなかった。外国商船は温州を目的地として選ばなかった。この港は南宋の紹興年間に市船機構が設けられたが、60余年後の寧宗慶元の年（1195年）以後、「寧宗皇帝以後、船舶を買うことを禁じ、江陽・温・秀州の３郡の務を廃止する」。温州の市舶務は行われず、宋が滅ぶまでの80余年の間、その舶務は明州に合わせられていた。

南宋の嘉定９年（1216年）、政府は法令をもって磁器を対外貿易商品のひとつとし、嘉定12年にまた金銭と外国商品の交換を禁じ、絹と陶磁器と漆器で貿易をすすめた。このように明州港には宋政府が市舶司を設け、対外貿易の監督と管理を行い、南宋代、寧波（明州）の水上運輸は繁栄し、国内外の市場は広がり、寧波商場の国際性は朝鮮との貿易から良くしることができる。1015年から1138年の間に中国商人が寧波から朝鮮に渡った27航海のなかで、泉州商人は12回、寧波商人は５回、広州と台州商人は各３回、福建と江南商人は２回である。この時期、寧波は泉州から山東半島の間の整備された沿海地区の商品集散地であった。このことは、朝鮮・日本および南洋各国の船の多くが明州に停泊したことを証明している。温州の貿易青磁は明州に運ばれ、積み替えられて運ばれたことは疑いない。

もう一度、各地から出土している龍泉窯の盤・五管瓶などの研究から、大多数は南宋晩期の器物で、特に龍泉大窯の蓮弁文装飾の薄胎厚釉の商品の年代は更におそい。舶務の行われていない温州から直接国際市場に向かうことは不可能であり、南宋晩期

の器は明州から輸出されたことは明らかである。

元初には全国に7市舶機構がおかれた。慶元（寧波）は元代東南沿海貿易の重要港であった。温州など浙江の市舶は間もなく慶元に合併された。この特殊な歴史状況は慶元港の発展と青磁輸出の上昇に決定的な作用を及ぼした。

台湾の陸慶光は龍泉窯青磁は福州から大量に輸出されたとしている。我々は、慶元が一大港で、朝廷も温州が慶元に編入されたことを明文化しており疑いがない。輸出品としてつくられた龍泉窯青磁は慶元を経て輸出されるのは当然である。朝鮮の沈船出土の龍泉窯青磁の多くと寧波東門口の宋元波止場遺跡出土器物の多くは良く似ており、その沈船には慶元路を示す銘文のしるしがあり、これは実際の証拠である。宋元層からは魚耳瓶・貫耳瓶・鬲式炉などが出土している。元代の器型はさらに多く、典型的な蔗段洗・貼花双魚洗・印花盤・蓋罐・高足・刻花碗・牡丹文瓶などがある。これらは寧波から運ばれたという事実を示す一面である。

以上アジア・アフリカ・ヨーロッパでは、いずれも越窯系青磁と龍泉窯青磁が出土している。一千年余り前の浙江人民が誠意をこめて作った青磁は国内の誉だけでなく、太洋を渡り、「磁器の道」を開き、中外文化交流と貿易往来の友好をなした。この「磁器の道」を通り、国外は直接・間接に越窯と龍泉窯の焼製工芸技術が伝えられ、世界文明と人類の進歩に積極的に貢献し、これは「絹の道」と一緒に歴史書に載せられるべきである。

付　記

この論文は中国海外交通史研究会・福建社会科学院歴史研究所・福建省泉州海外交通史博物館が共同で編集する『海交史研究』第5期（1983年5月）に掲載されたもので、著者の林士民氏は寧波市文物管理委員会に所属する。

寧波は浙江省の省都杭州の東約140キロにあり、唐代から貿易港として栄え、遣唐使の着いた港としても日本と縁が深い。寧波市街は西北から流入する余姚江と南から流入する奉化江が合流し甬江となる地点に発展し、東中国海へは甬江に沿って約20キロである。古くは明州、元代には慶元と呼ばれた。現在も上海・温州との定期航路で結ばれ、華中の沿海交通の要である。

林氏は「寧波東門口碼頭遺址発掘報告」（『浙江省文物考古所学刊』）を1981年に発表している。1978年・1979年にビル建設に先立って実施された発掘調査の結果であるが、調査地点は余姚江と奉化江との合流点付近で、唐宋代の波止場とされる。現在は

寧波市の中心で人民広場や人民影院（映画館）がある。調査は５ｍ×５ｍのグリッドを何カ所か設け、調査面積は合計350㎡である。３ケ所の碼頭（波止場）跡と船の修理場、石敷道路、宋船一隻などが検出されている。宋・元時期の龍泉窯青磁・青白磁が出土し、韓国の新安沖沈船出土資料と一致していることから、寧波から出港した船が沈んだものとみている。調査では層位が５つに分かれ、各時期の遺物組成がよくわかる。

本論文は1981年の論文をもとに中国陶磁器の輸出に果たした寧波の役割を論じたものであるが、寧波の近くには越窯青磁の生産地がある。とくに著名な上林湖窯はかつて余姚県に属し、越州余姚窯または余姚上林湖窯と呼ばれてきた。近年は慈渓県に編入されている。越窯青磁とともに唐代の貿易陶磁として注目される長沙窯は湖南省望城県銅官鎮、石渚湖一帯に分布している。これらは初期貿易陶磁とも呼ばれ日本国内にももたらされている。従来、古代の都城中心に分布するため限定された所有階層が想定されてきた。近年の調査では都城以外の出土例も多いが、なお出土地や量は限定される。本市では嶋上郡衙跡と郡家今城遺跡で越窯青磁碗の破片が１点づつ出土している。やや古くなったが、『奈良・平安時代の中国陶磁』（橿原考古学研究所附属博物館　1984年）に出土状況がまとめられている。また、森田勉「中国・朝鮮陶磁器の流通について」と土橋理子「晩唐から北宋時代の中国陶磁出土状況の定量的分析」（いずれも『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　1986年）では問題点がまとめられている。

龍泉窯青磁を含めて西アジア・東アフリカ・地中海地域へ輸出された中国陶磁器については、小山富士夫氏の『支那青磁史稿』（1943年）や三上次男氏の『陶磁の道』（岩波新書1969年）に詳しくまとめられており、林氏の論文もこれらを参考にした部分が多い。また、林氏と同様の主旨の論文として李知宴「越窯と銅官窯磁器の発展と輸出」（『貿易陶磁研究』第２号　1982年）などがある。

なお、西アジアの地名や陶磁器の器形について訳出できなかった部分があり原文のままとしている部分がある。また紙数の都合で西アジアでの出土状況を省略している。

編集後記

平成３年度は、芥川遺跡において大量の縄文時代後期の土器の発見につづき、上田部遺跡での弥生時代の水田や古代集落を検出、さらに大規模な環濠が急峻な斜面に巡る古曽部遺跡など考古学的な“発見”の多い年でした。今回の調査報告は上田部、古曽部のほかに嶋上郡衙跡で検出した大規模な建物や古代の官道である山陽道跡など主要な遺跡についての速報性が高いものとなりました。今後は、資料紹介・研究ノートなどを活用して“成果”にも重点をおかねばならないと考えています。

そのほか、名神高速道路内遺跡調査会が調査をおこなった梶原古墳群の概要もあわせて掲載することができました。調査機関こそ異なれ、同じ高槻市内の重要な遺跡ということでもあり、今後も積極的に掲載したいと考えています。

また、平成２年度に調査の終了した新池遺跡が、今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡として国史跡に指定されました。本市にのこる貴重な遺跡のひとつであり、市民に親しまれるよう保存・整備し、公開していきたいとおもいます。

（Y・M）

図　版

a．梶原1号墳（空中写真）

b．丸山1号墳（空中写真）

c．梶原1号墳石室（北側から）

d．丸山1号墳石室（南側から）

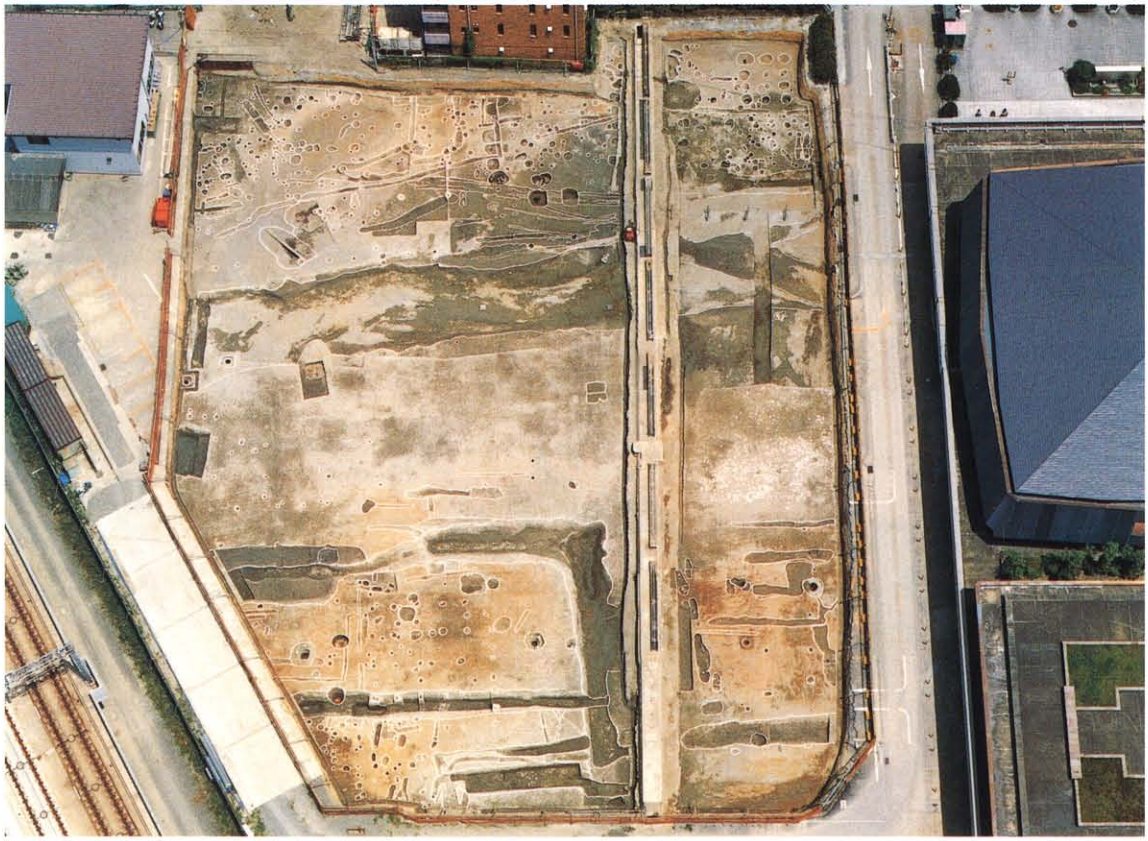
e．杏葉

f．杏葉

g．鏡板

図版第2

a．空からみた上田部遺跡（東側から）



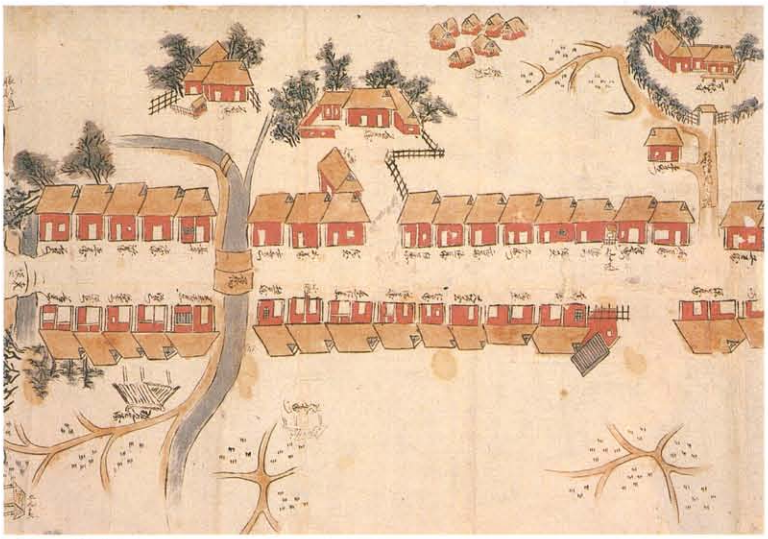
b．上田部遺跡　当初調査区全景（空中写真）

a．古曽部遺跡　Ⅰ・Ⅱ区全景（空中写真）

b．古曽部遺跡　Ⅱ区全景（空中写真）

図版第4

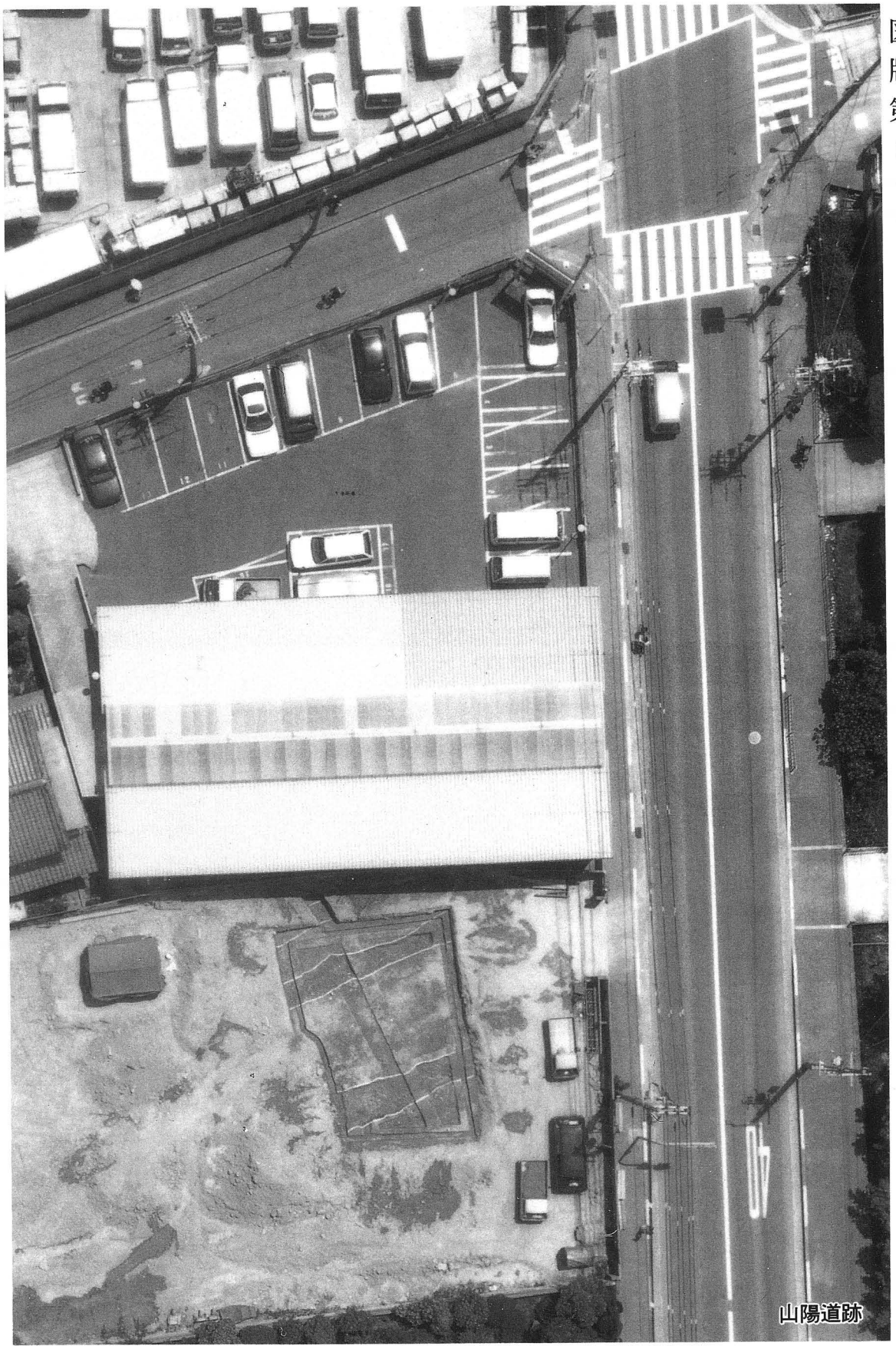
a．芥川宿絵図



b．殿垣内

c．本陣

d．一里塚



a．山陽道跡（空中写真）

a．山陽道跡　東側調査区全景（西側から）

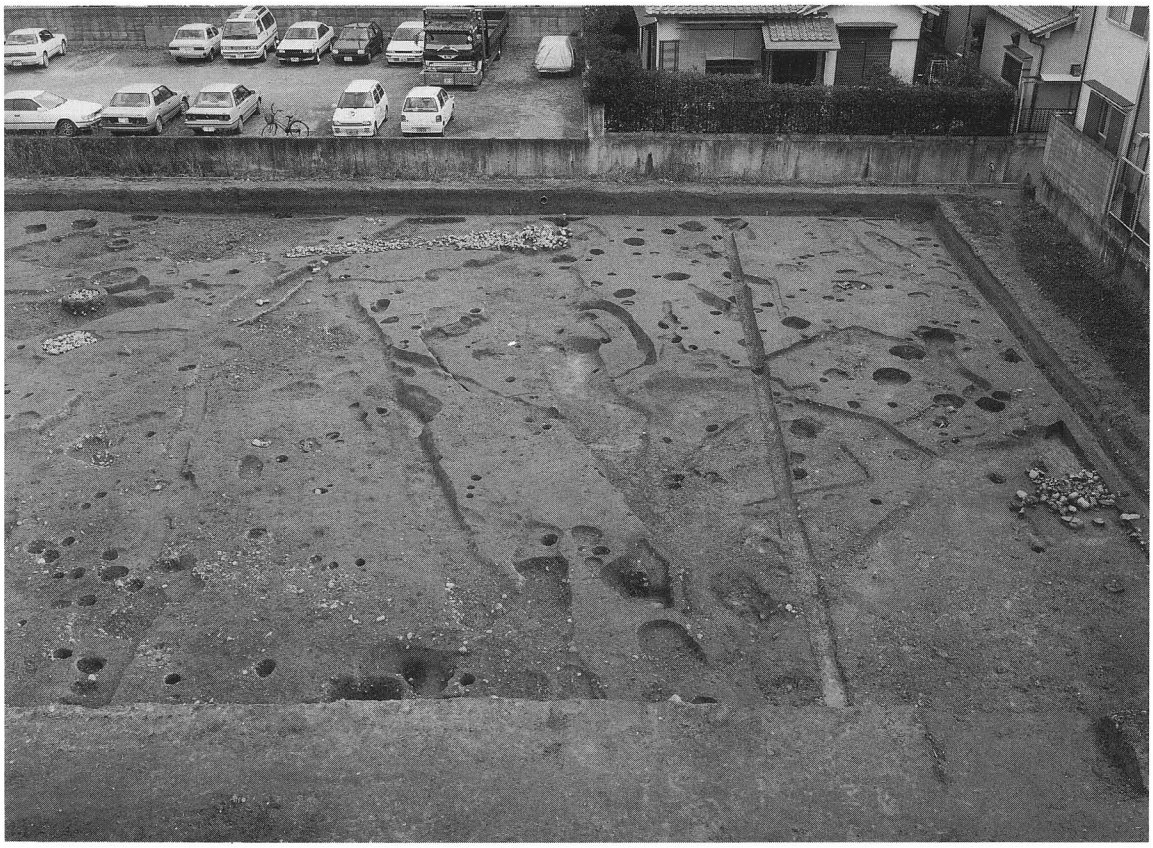
b．山陽道跡　東側調査区全景（東側から）

a．山陽道跡　西側調査区全景（西側から）

b．山陽道跡　西側調査区全景（東側から）

図版第8

a．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　東半北部（西側から）



b．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　東半南部（西側から）

a．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　西半北部（東側から）

b．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　西半北部（南側から）

図版第10

a．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　掘立柱建物１（東側から）

b．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　掘立柱建物１（南側から）

a．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　掘立柱建物２（南側から）

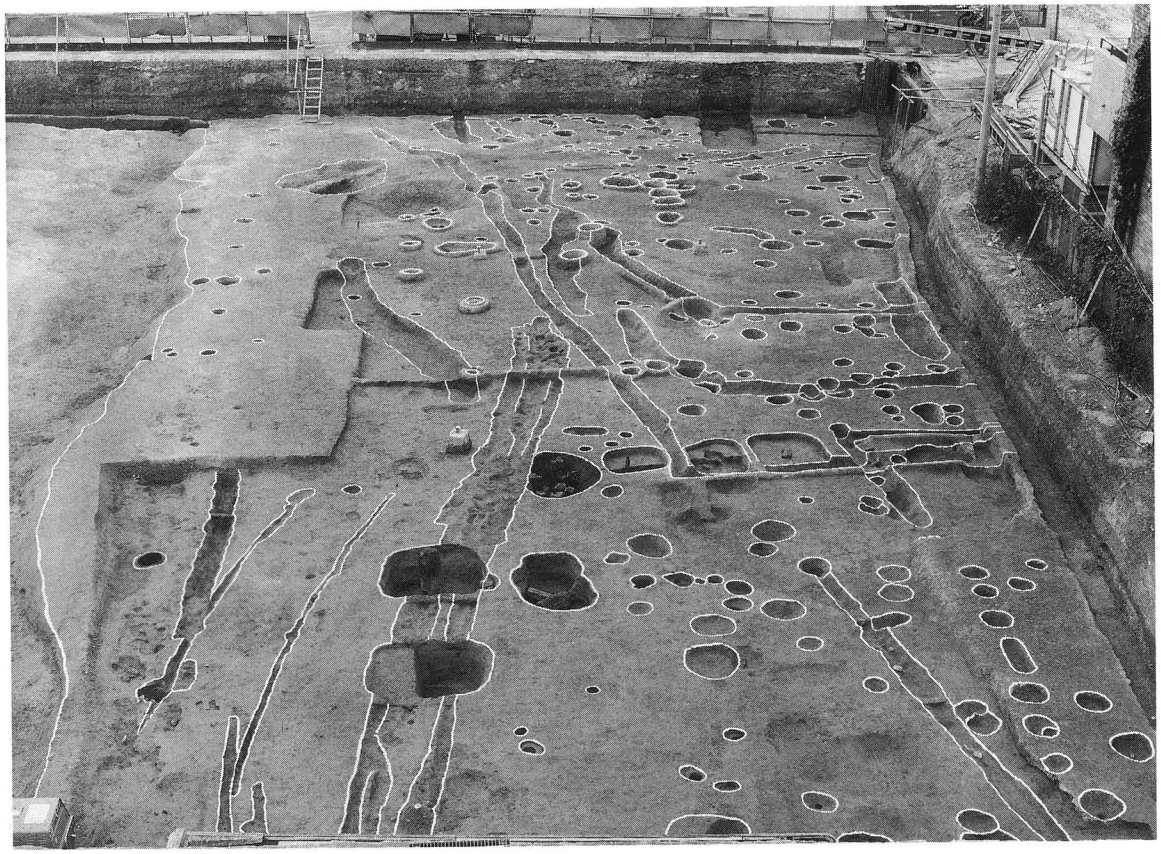
b．嶋上郡衙跡（16－Ｊ地区）　掘立柱建物３（南側から）

図版第12

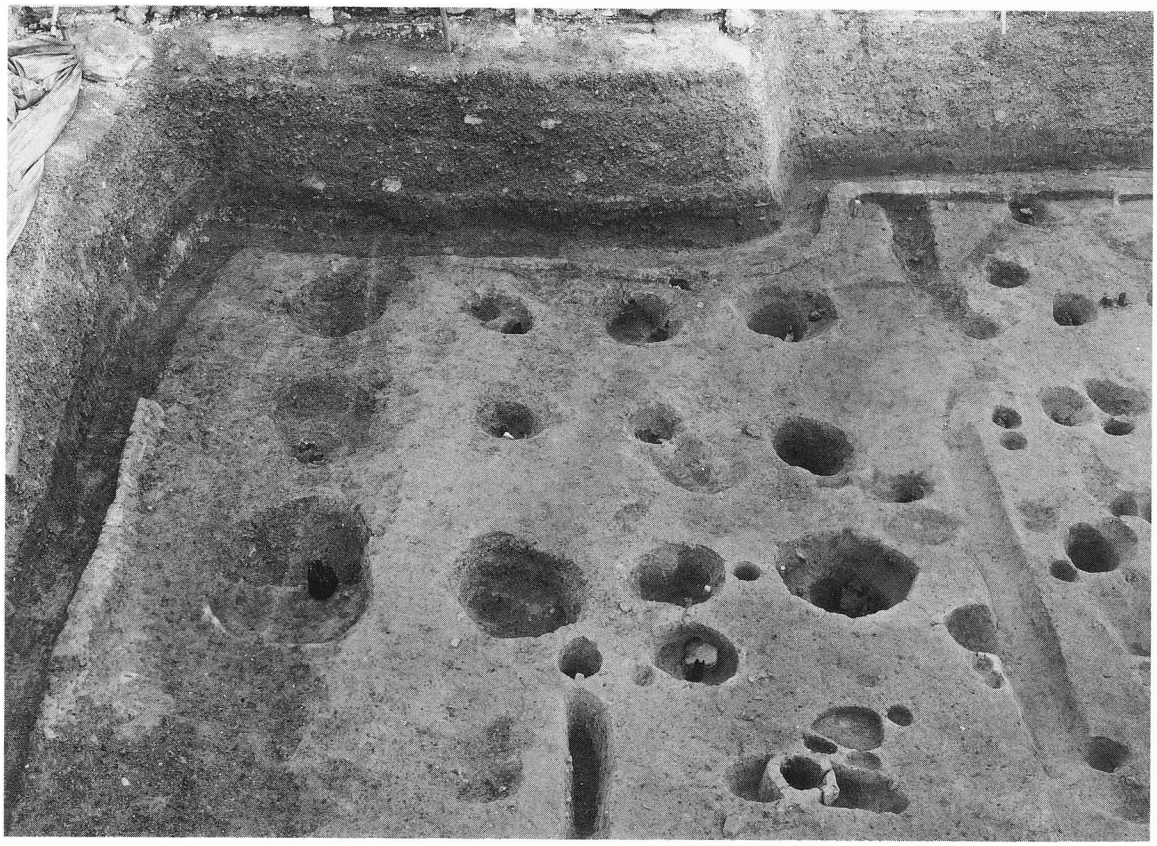
a．上田部遺跡　弥生時代遺構面（南側から）

b．上田部遺跡　堰跡

a．上田部遺跡　全景（空中写真）



b．上田部遺跡　調査区東側の状況（南側から）



a．上田部遺跡　建物１（北側から）

b．上田部遺跡　大形柱穴３（北側から）

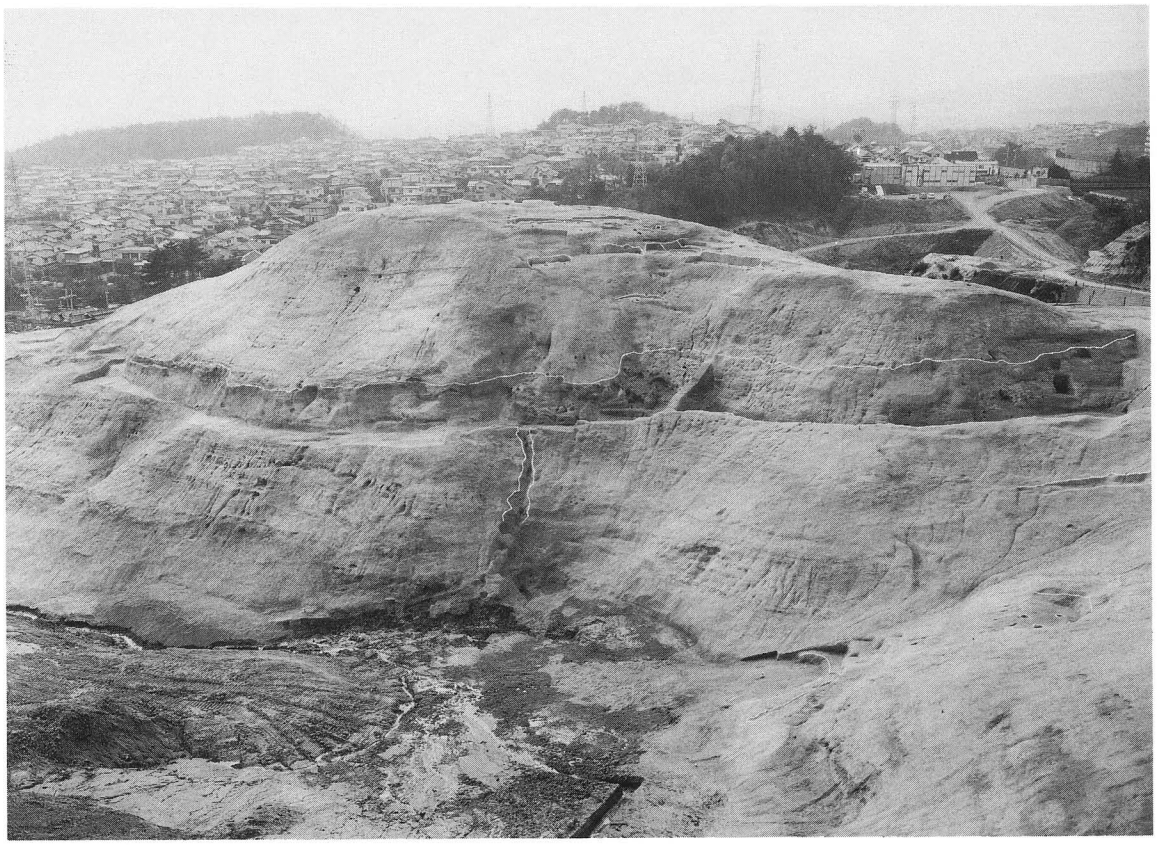
c．上田部遺跡　足跡

a．上田部遺跡　屋敷地（南側から）

b．上田部遺跡　土壙墓

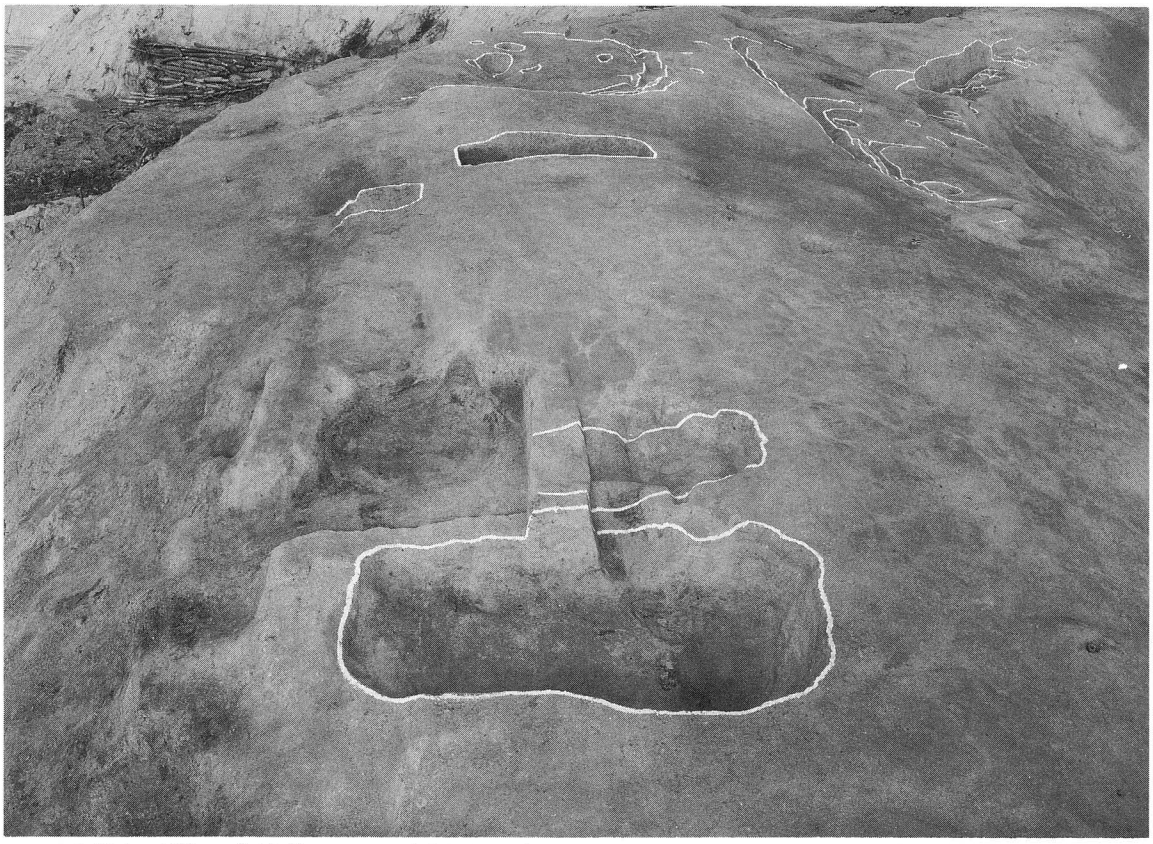
a．古曽部遺跡　Ⅰ区全景（東側から）

b．古曽部遺跡　Ⅰ区全景（西側から）

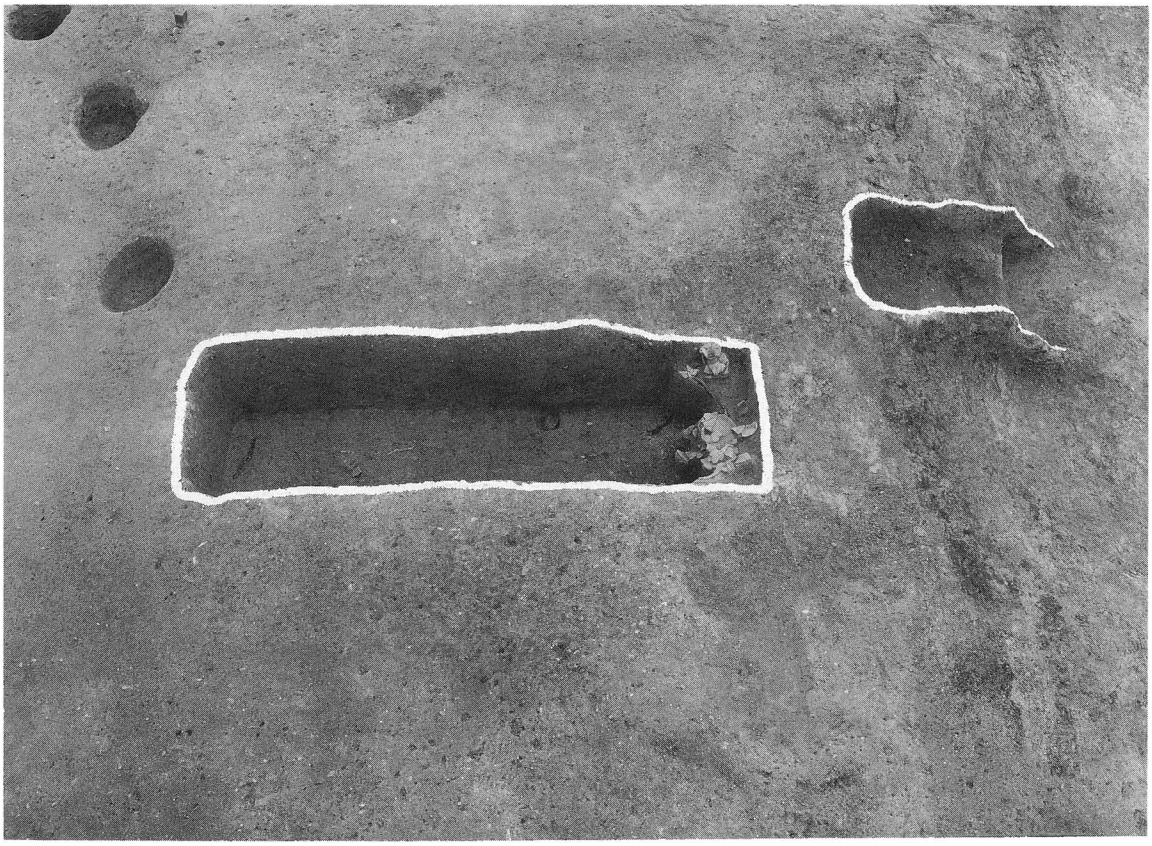


a．古曽部遺跡　Ⅱ区全景（東側から）

b．古曽部遺跡　環濠とⅡ区住居群（北側から）



a．古曽部遺跡　木棺墓１～４（南側から）



b．古曽部遺跡　木棺墓４（北側から）